

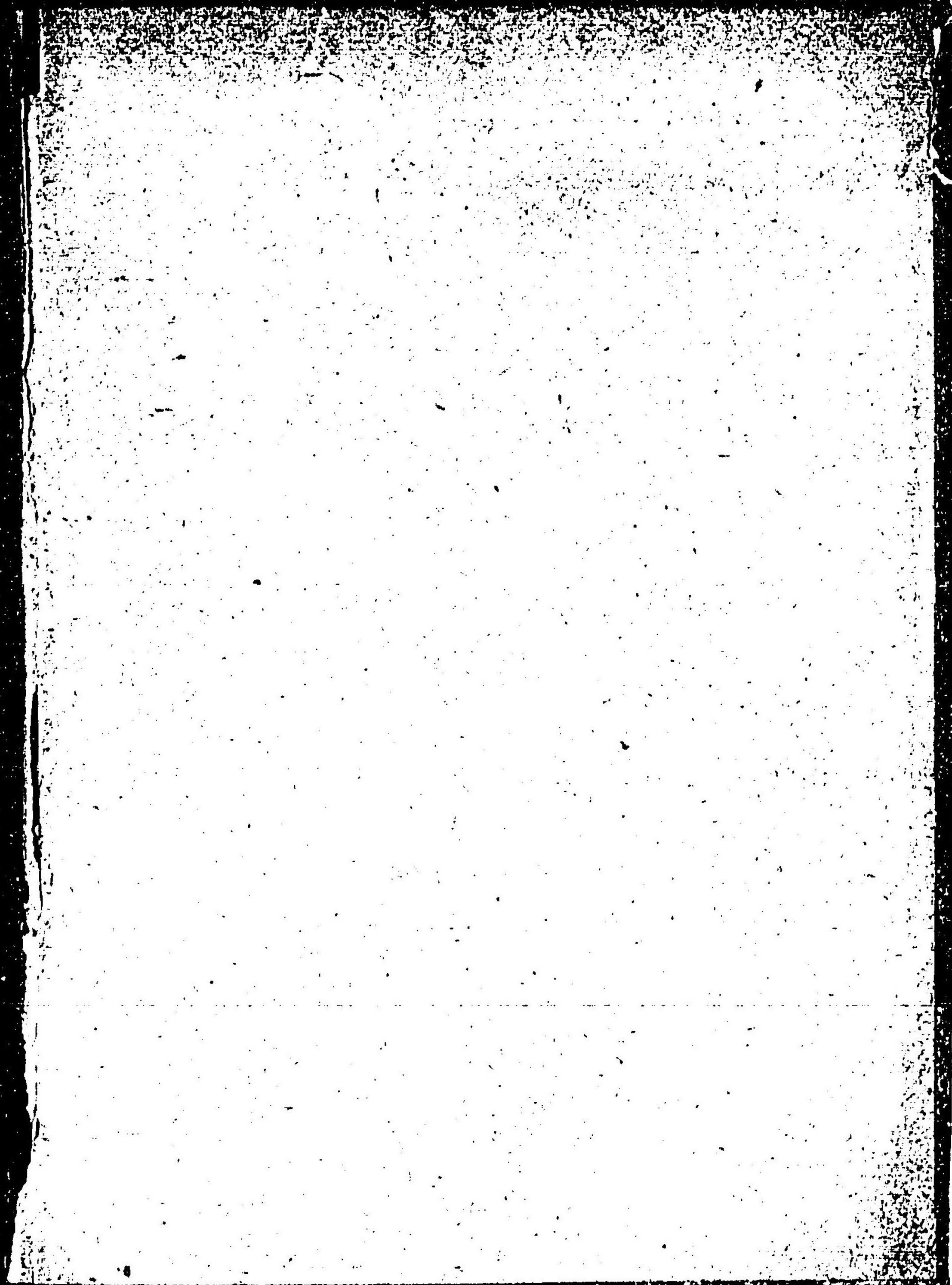
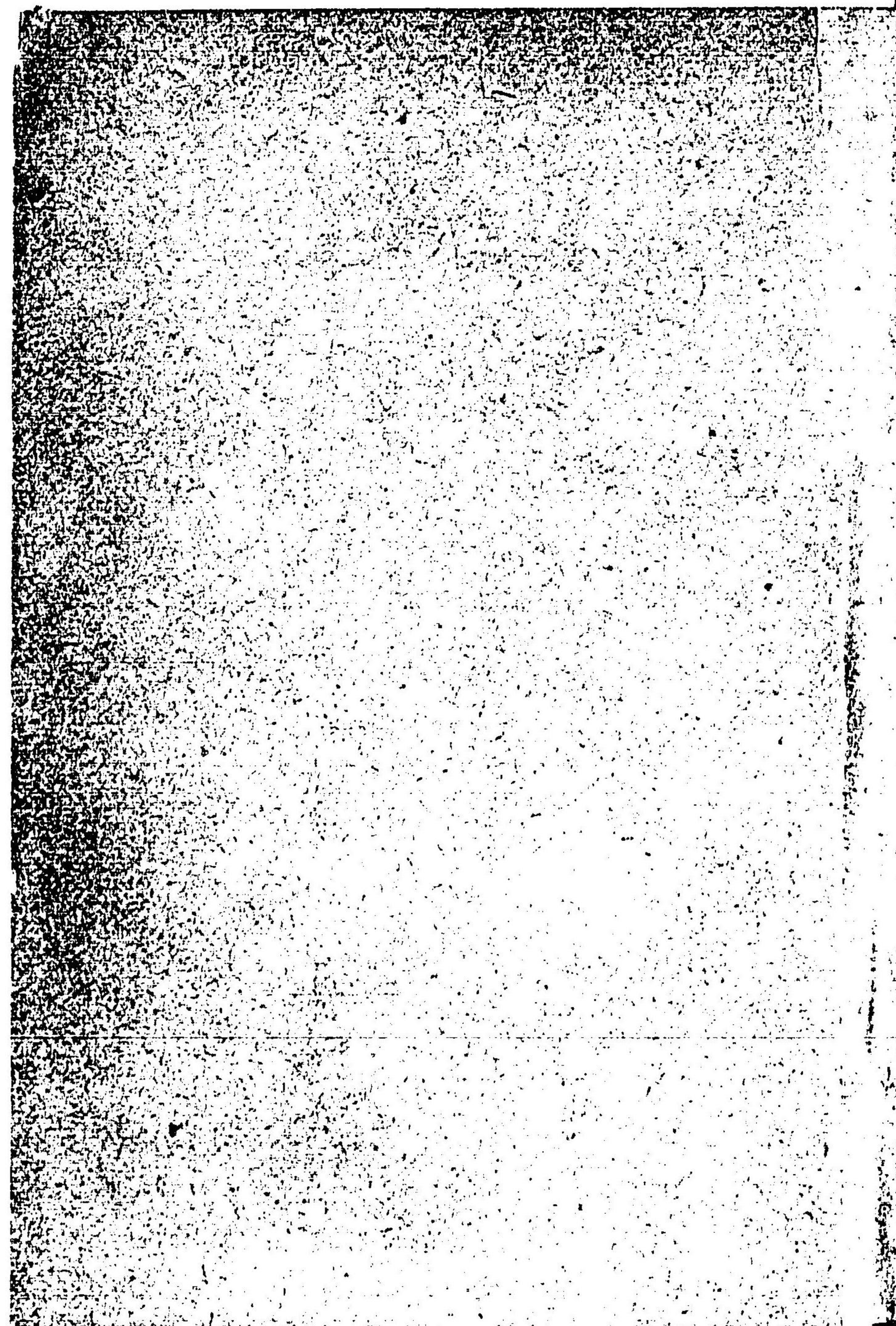


將容頭進

萬壽無疆

子孫

萬壽無疆



No 11384

62

特 62

はしがき

夏の日永のうた、寝の夢かうつ、かまぼろしかど浮世を過せ
 世の中の遷り變るは恐ろしく電信よりも尙ほ早き十九世紀の
 今世に生れ出たる動物が社會の諸藝を知らざるは此の世に生
 中なかは月つきに村雲花むらぐもはなに風儘かぜごとに成らぬ世の浮世三日見ぬ内櫻花うちざくら昨きのう
 日ひふ有りて今日けふふなさは實じつに人間の生命にしてはかなき者の
 限りなきさらば浮世の人よよ氣も付さら突戀書と政痴學か
 ら閨妻學幼學寒學を元素と一端歌永歌トツナリトソ川柳發句
 都みやこ一迄覺てころは樂きけれ然るを端歌都みやこ一を賤業者の仕
 事とし之を賤み習ならはは無粹の者のなまをぞ諸藝に達して世
 を渡る人ころ眞の人なるぞとい云ふ者の閨妻學を棄て置てト

ニツチリトント都と一を歌へど云ふには非ざるを只午睡の其歌
 に二三を覺へて樂めどは昔し唐土きやうどの粹さんも藝に遊びと云わ
 しやんしと哩ナ一

明治二十一年七月

花柳酔士あるを

粹客 萬藝玉手箱目次

● 地歌之部

- なのえ
- ぼるの聲
- 一ツくづや
- こまの戸
- 高砂
- 七 艸
- ちうらい
- せりはち
- あさとで

一 一 二 二 三 三 三 四 五
 丁 丁 丁 丁 丁 丁 丁 丁 丁



二
 ○ ○ あまかり
 ○ ○ 袖のゆき
 ○ ○ ろでどろろ
 ○ ○ き
 ○ ○ くるかみ
 ○ ○ もかり此月
 ○ ○ まつの二葉
 ○ ○ かよふかみ
 ○ ○ まさ月
 ○ ○ 扇すくし
 ○ ○ もらざら
 ○ ○ ねんのつな
 五丁
 五丁
 六丁
 六丁
 七丁
 八丁
 八丁
 九丁
 九丁
 十丁
 十丁
 十一丁
 十一丁

三
 ○ ○ 菊のつゆ
 ○ ○ つゆのてふ
 ○ ○ ひなぶり
 ○ ○ 福壽艸
 ○ ○ 松づくし
 ○ ○ 灘づくし
 ○ ○ やちよじ、
 ○ ○ 椿づくし
 ○ ○ 玉川
 ● 江戸歌之部
 ○ ○ ながしの枝
 ○ ○ 新さぬき
 十二丁
 十三丁
 十三丁
 十四丁
 十四丁
 十五丁
 十五丁
 十六丁
 十六丁
 十七丁
 十八丁
 十八丁

四

- 浅づま
- 一ツとぎ
- おろめ
- ふんや
- おとしふみ
- 京四季
- 夕がほ
- めうと萬歳
- 紀伊の國
- 白びやうし
- けろふふみ
- 狂らん

十九丁
廿一丁
廿二丁
廿四丁
廿六丁
廿六丁
廿七丁
廿八丁
三十丁
卅一丁
卅二丁
卅三丁

五

- あいおいじ、
- 新かむろ
- 正月むそめ
- ねびら源太
- あさかのまつ
- 花車
- さらし女落がん
- 汐虫み
- 俄じ、
- 浦老ま
- 紅葉がり
- 浅州名所

卅五丁
卅七丁
卅九丁
四十二丁
四十四丁
四十六丁
四十八丁
五十丁
五十三丁
五十五丁
五十七丁
五十九丁

六 ○ 犬かみ 六十丁
 ○ 高砂さんせん 六十二丁
 ○ 馬のり 六十三丁
 ○ 正札附くさずり 六十六丁
 ○ 濱の松かせ 六十八丁
 ○ 秋の志らべ 七十丁
 ○ 石橋 七十二丁
 ○ 越後じゝ 七十三丁
 ○ 夜さくら 七十五丁
 ○ 水の出ばな 七十五丁
 ○ 熊坂 七十五丁
 ○ 桐のあめ 七十六丁

○ 種まき三番りう 七十六丁
 ○ 老まつ 七十八丁

● 端歌之部

○ 色けないとて 八十二丁
 ○ かき送る 八十二丁
 ○ 花のくもり 八十二丁
 ○ きぬなうきよ 八十二丁
 ○ 秋の夜 八十二丁
 ○ おとがい 八十三丁
 ○ 加賀の千代 八十三丁
 ○ 夕立 八十四丁
 ○ 西行 八十四丁

八〇一夜あぐれば 八十四丁
 〇くせつして 八十四丁
 〇むつとまて 八十五丁
 〇うろとまこと 八十五丁
 〇羽織かくまて 八十五丁
 〇あふと夜 八十六丁
 〇萩拵 八十六丁
 〇どて 八十六丁
 〇まのふ夜 八十七丁
 〇くち 八十七丁
 〇我もの 八十七丁
 〇三國一 八十八丁

〇けさの雨 八十八丁
 〇あき艸 八十八丁
 〇薄すみ 八十九丁
 〇みわひとつ 八十九丁
 〇かねてより 八十九丁
 〇まがの唐崎 九十丁
 〇艸もねまづむ 九十丁
 〇一聲 九十丁
 〇若の浦 九十一丁
 〇花むらさき 九十一丁
 〇仇なせかい 九十二丁
 〇新玉川 九十二丁

十
 ○木津川 九十二丁
 ○仇なゑがほ 九十三丁
 ○雪わともへ 九十三丁
 ○思ひこんだる 九十四丁
 ○雨わさきりに 九十四丁
 ○まのふこひじ 九十四丁
 ○夕ぐれ 九十五丁
 ○柳橋 九十五丁
 ○四季季 九十五丁
 ○四季三下り 九十六丁
 ○宇治茶 九十七丁
 ○富士 九十七丁

○雪のまんく 九十七丁
 ○なせにりのとに 九十八丁
 ○まんと 九十八丁
 ○浮名とてじと 九十九丁
 ○水のでばな 九十九丁
 ○夕立 九十九丁

●清元之部

十
 ○梅の壽 百丁
 ○北洲千歳 百一丁
 ○山うば 百二丁
 ○落人 百三丁
 ○夕立 百四丁

二十

- 忠臣藏四段目力彌 百五丁
- 同八段目旅奴 百六丁
- 四季三番叟 百八丁
- 梅柳中霄月 百九丁
- 能色相圖 百十四丁
- 淺艸祭 百十七丁
- 祇園町一力之段 百十九丁
- 喜撰法師 百廿二丁
- 由縁曆歌 百廿五丁
- 明からを花の濡衣 百廿九丁
- 其小唄夢の廓 百卅四丁
- 濡嬉浮寐鳥 百卅六丁

● 淨るり之部

- 千代萩御殿場 百四十丁
- 千木櫻をいやの段 百四十一丁
- お俊傳兵衛猿まわし 百四十二丁
- 三勝酒屋の段 百四十三丁
- 朝顔宿屋の段 百四十四丁
- 阿波重 百四十五丁
- 菅原寺子屋の段 百四十六丁
- 伊賀越沼津の段 百四十六丁
- 玉三 百四十七丁
- 廿四孝問向場 百四十八丁
- 紙沼こゝつ 百四十九丁

二 やかに。かたりわかせーかわいとばうろかまことかうのこと
のはに。つるの一ひこいへ聲こゑいく千代ちよまでもきへはたがひのともしらが
○ひとつくすや 本てふし
ひとつくすやに。四季の花。きいなきらせん。むろちの
むめいといかわいとなでーこのあよれつもつれつ糸いとぐら。
かさねうの花かきつばたあからさほうたのめうとあひ。かわら
らしいじやないかいな

○あすの戸こ

本てふし

うさくさいしあんのあかのさうふみづてらがうさよかうあ世
がこい戀こいかちよと聞きたいまつのかせあとへとてたるあ山やまほどあま
を月つきやいものをやるせなきあしやくにうれしあ男おとこのちからに
つと手にてをなあにあもあいあわあすあふあたりあしてあるあかあやあのあひあ

○高砂

三下り

高砂たかすなや此浦このうらふねに帆ほを上げて。月つき諸もろともあにあいであしあほあのあ。浪なみのあ淡あ
路ぢの島しまかげや。遠とほくなるあほあのあ沖せきすあぎあてあ。はあやあ住すまのあねあにつあきあにあけ
りあくあ

○な、くさ

二下り

まあ引あすあずあらあまあのあわあがあよあもあらあまあじあ。らあしかあわあやあ。せあみあのあをあがあわ
のあたあえあくあとあ。をあもあへあばあ。くあ。ああとあするあ。すあいあなあすあいあしろあああみ
さあびあてあ。くあもあのあうあへあにもあはあこあらあやあむあすあびあーあ水あもあ。へあだあてもあな
みあのあ。ほあとあけあのあさあよあああめあつあちあとあきあやあうあやあわあらあまあてあ。ひあかりあのと
けあさあちありあわあかあぬあなあづあなあせありあつあむあーあつあのあめあもあ。もあまあさあであらあはあふあ。

三

千代ちよやあちあよあ

○寶たから來ら

本てふし

四 いたいさますと手に早う。まわりかけたるさ。きげん。うみ
じやぬいかやほんだはら。かうじて淨名たち花色香になづ
けかしますと。のしのつけたいと。やらがと。ろがらとてよ
ろこんぶ。あの餅花の柳さへうれ春風がふまわいな。たいく
かさねいせゑびやよはらの腰のかくむまで。かわりたもふぬ
かわらじと。ぬがきゑにしをかちぐりや。ふるることながらゑん
もよしよしむつこと。らつ造も。つさせぬまさごかぎりぬま
夜は。ほのく。と日のあしも早山をさにしでにけり

○すりばち

二上り

うみ山を。こゑてこのよにすみなれて。ひよくれんりどちきり
し中も。煙をたつるしづのめが。こ。ろぐに。あわぬ日も。あ
ふ日もよるはひとりぬの。くれををしみてまつ山かづらひる

のみくらすすさともかな

○あさまで

本てうし

さだめなきあらしもろひてあなしねに。花かとしものれきて
もひとり鳥のなくこゑはるにはにても。あちばいろく。あち
ばがなかに。すいたいてふにとりあげがみの。いへはすがたも
大坂といふ。ざいしようまれのむめの花

○あしかり

二上り

われはこひに。くるわねど。こひといふ字にまよふゆへさり
とて。しらすさぎの。と。い。まれとまれとまねくてかせにゆきすま
て。またもよをすはまかせにあしもさわたち。いろのなみ
まつかせころのざいんさん

○袖のつゆ

二上り

六 しら糸のたへーちぎりをひととわん。つらさに秋のよを長き
あだにといくる月はうちめしくあけがたのまくらにさうふ
松むしのねもたへだへにいといなををまふく風のねとすれ
を聞やとまちてわびしさのなみだにつものれきて思ひ。ふし
て丸ねのろでにかわらん

○ろでござろ 二下り

はるのこのやみはあやなしうれかどよかやのうくる、梅の
はちちれどろほりはなをのこるたもとにさやらのけむりぐ
ささへておしめのろのうひもなまたま衣ほんに、やあまは
みどりまれあのはあをきて、うへるうり

○あま 本てふし

花もゆきもはらへばまよきたもとあな、やんにむうしの昔の

るをわがまつ人もわれを待けん。おしのれどりにもの思ひは
のこはるふきまになまねはさうなきさなきだに心もとふき夜
半のかね、まもさびしきひとりねのまくらにひくあられ
の音も、もしやとらつろせまかねて、あつるあみだのつらさを
りつらさのちのおしからねども戀しき人はつみふかくをも
はぬ、ことのかあしさにきてたうきよきてたうきよのやまか
づら

○くろかみ 三下り

くろかみのむすばれたる思ひをばどけてねたよ枕ころひ
どりぬるよのあだまくら、うでのかた、くつまじやとらうて、
ぐちなおなどのて、ろとしらでしんとふけたるかねのこへ、
夕べのあめのけさ、めてあかしなつかしやるせなやつもると

八 しらでしるるしらゆき

○也かりの月 本てふ

うしとみー。ながれのむかしなつかしや。かあいに男にあふさ
かの。せきよりつらいよのならひ。思はぬ人にせきとめられ
て。うまはのさわのひとつみづ。すまぬこゝろの中にもしばし。
すむはあかりの月のかげ。しのびてうつすまどの内ひろいせ
かいにすみなか。せまうたのしむまこと。まこと。こんなな
にしがからにもあるか。花さく里の春ならば。あめもかをりて
名やた、ん

○まつのふたば 二上り

まつまつのふたば。あやかりもの。あをばりましてあち
ばさへ。うせかばらぬちぎりとを。うれしからふであるまら

の

○かよふ神 本てふ

田ごとにうける月かげならで。夜ごとふかはるまくらのかす
の。中にすいありふせいあり。すまぬ心をすむ月の。何がしん
きのたねじややら。しりめほかひもよそにして。まかせぬしゆ
びをわああるやふよ。ぐちなせりふがまひのじつせへを野と
あれ山みづの神にゑにしをまかせぬん

○まさ月 二上り

九 乃きごととに。色をかざるやみつ。此あさすげなき松もゑがほと
見えて。風にうでふるさとと。かあいらしさ。と花のかを。と
ふてみたいをやゑがすみ。おをひをつ。むわけほのにて。ろ
乃などをかけて見る。こぬ夜はひとり思ひぬのてがる。むね

十のふくわかし。神のとして。末ながかれと。あゝの社のぬ、
卿を。はやしろやされからどりのわたらぬ。ささにしばしが
ほども。たつたひととのちにエと。いふてわかる、をひ戎き
みがやくそくたがゑすに。まいましたと。うしろから。せなか
た、いてたはふれもさ、のきげんの千代よろづ。かざりもて
ひをうちとけて。なをわくふかくちきりける

○扇づくし

二上り

花のいろをうつりにあらないたづらに。これ見よかしとでん
ちうで。たがひにぬれし袖あふぎ。かはをひあふぎあてめせん。
なもいはもとのみやしろに。ませつあふぎのされいせんぬか
よさあふぎやへひとへ。千代のまひづるうつしをやあふぎの
かづそつせぬどい。せけひらあはめがした。みなはるぬれ

やよろづとの。なをわんせんぞめでたぬれ

○もうぞら

本てふし

筆のさや。たいてせてまつ。かやりびの。うははらうらにやたち
のぼる。みづにかすかくまくらのしたをまひうつもりてけふ
のせに。身をうさくさの。糸いる。まをなき。あゝまゝ、ならぬ
こそ。あゝ、ならぬ

○おんのつね

二上り

はるのいつ。かさふならる、ゆきをりも。ゆれあさ人仕つめた
さを。六ツの哥仙をよみびて。やたけご、ろにまひきてふ。
かざすやたんのかんざりの。さきまひくぬねらうへもよせま。
神にもまゝくゆらの戸の。あつとやうらうらがてんじやあいか
あゝようそろのんて。なをあきたてのふなはた丸に三引

二十
ひ風や君よ扇乃かへをんを。い海のつかさをとたん。手くた
中をるだつるませのさく。咲くをにまやもうでりに。かゝるをを
みぢのこむのをに。たんば大江の山とりも。まさか思ひや八く
もたつ。うづをやへがさたまごめを。どこへむすばんねんのつ
き

○菊のつゆ

本てふし

どりのこへかねの音さへ身にしみて思ひだをほどなみだがさ
きへれちてぬがる。いをせ川を。とわたるふねのかじだにた
へてかひもなきよどうらみてそくる。合二上り「思わじなあふは
わかれといへどもぐちにはの小ぎまのその名にめで、むる
はながめてくましもせふがよるとる毎にねく露のつゆのいの
ちのつれなやにくや。いははこの身にあさのかせ

○露はてふ

本てふし

世の中をなに、たせへんあまか川。さのふのぬらさをあふのせ
と合かわりやすさをひとしいはをこのみにおいそもころを
合つてよ
月夜のろらやとりかねをうまめ。ことこのあだ枕。うさよあち
すやくさにねてはなふあろびてあ。たには露にや。なふてう
くのみぞうらやほしあじさなやあもひきりなきお服ごぎの
なみだにしたせうでまくら

○むなぶり

本てうし

三
あひのをものにのなる。しまのうち。をくりむかひにかまかどの
たれであるふとしてこひさ。ばうばなにく、りつけたるう
ちんの。むがらのやくそくして来たな。たかいもひまいもひる
のみちな。へたてるたてん。はいさつへもつさぬたのしみあ

さのささあさあせくゆめのかよひになん

○福壽草

二上り

はつ春の。日なたへなあきふくじの草めでたきあ代の、とか
さよ花のこゝろにうつり氣なつづばみさへひらきそめ

○松づまし

二上り

うたいはやせや大黒一ッ本目に池の松二本目ふえ庭のはつ
さんばん目よえさがり松四本めに志賀のまつ五本目には五
葉の松六ツむかしの高砂乃尾上のまのや曾根の松七んめに
は姫子まつ八本目ふは濱比まに九ツ小はつを権なまべ十で
せよくの伊勢のまつ此まつはふようの松にて情けあり馬の松
がねにくどけばなびく相生の松はたいつくもの約束に目を
まの時はつくきをまに連理の松にまぎりをこめてたてたいり

りか喜びす

○たねづくし

二上り

くもいにさらき布引のたきつせもこそさみだれにいつれあ
やめはかるとバナひくてあはたの身あれどもいかにあはらぬ
有馬山西にをなのみわけはさやつらみがたきのその音はあた
へすとぬたりあきながたきのおをてやみのうらみなるそま
はあづはじ日のひかり月ふたましまさがの、ゆめやせなせふ
あつた大ぬ川くだをいかだにふるもきはちりかふはぎと見ま
がいて山一づかなるあねのゆきあたかにほもるやう老のなを
もよはひをほすいづみ

○やちよじ

本てうし

いつまでもかまらぬあ代にあいたけの、はいら千代。やち

六十
よふる^雪ゆたぞか、れるまつ乃ふたばにゆきぞか、れるまの
のふたばに

○椿づきし 本てうー

つらくつばね春秋の。名はちさとまでたかがみ結その本わ
みの花のいぢ^合まろきをのちのうつしるもいかであよばん妙
れん寺^合うそくれないにこきまよは。をなし花形のいなば堂^合
またきーおりの秋乃山。さがはつあらし身にーみて。露ーぐれ
ふれてるをりも。すたもてあうびうづみ火よ春にうつまばあ
めがーたニ上りにまはふ民乃けまうたつ^合そまは鹽がまちかの
うら。しやくむあまのこしみの、あづまかしげやあづまぢ
や。たとすのさまのちりゆばま^合さたものまなぬまのくら^合
やぶの中なるかうのもの。ばくはんわびすまかしつがま。八千

代はさせぬはぬのかす

○玉川 本てふし

山しろの。井手やままじと駒とをて。なほ水かはん山吹花
の^合ゆそうはるもくれ^合あつつきにあらー見とたせば^合波のし
がらみかけてあり。卯乃花さける津の國^合さとに^合月日をお
曲るる^合三下り^合つしかあまにわふみなる。野路には人のあ
まも^合い^合はをさかりのはまこをて。色な^合あふにやどり
よし。月乃みそまの冬深み本てうー雪げもをうすゆらされば^合
は風^合あーてみち乃まの。野田ふちどりの^合あまさびし。ゆかし。
名たるまさーのにさらま^合あらすまづくりさらく^合に^合ニ上り
七十
むかしの人の戀しさもいま。はたりむ^合絶の國乃たのどくな
る。ますまても。まみやーたらんたび人の^合高野のおくのりみつ

八十 迄も名に彫がれたるむりの玉川

●江戸哥の部

○流しの枝

本てふし

行くれて木の下かげをやと、せや盛にしられぬもさどちる。花のまくらよふいさのひとねにくやあらしのあてことを開てながしの花のゑだはん男のさばかりくんで一夜はるねのろひぶしもいわぬいらうにらやまさる花やこまひのあるじなままじ

○新たなぬき

本てふし

られてつばうおろし玉ですり。ひねわをつけてねららよる。たぬきたまますばさくとはい出て。「のふ」「しばらくまらたまへア、若うげの藤のうらち」「男たぬきがねりやす」「ふ

うよの中むつまじう「たがいかわるなりはらじと言かじしたむつごとに身もちに彫つて身もおをさうれをねまへにうゑれていはらぬるわが子いやみながらやみどうぞたすけてくだされと手をあししてをぬのみける」「みやもりともになみたぐみ人げんちくしやうとかわれどをねんあいの彫げきかひまじごとつはうれるしぬちあがれば「ぬぬきお、さにもろこんでいのちたをかるぬれいにいぬがねをいだし腹つづみ只今さうしやべーどはらぬせおろしさをかまへ身宮をりほとんどうんじいらちらく「ほう」の打わけのまことどのついにみにほさるべーめでたしく〜とわろふてころのかへりゆく

○淺づは

三下り

「さし涙や八十のみなとにふくかせの身にしみろむるひへ

二 ねねし千ふね百ねねをたて、いるやさしねの柳うげ「この
ねねる。あさづまふねのあさからぬちぎりのむかしりさんさ
うらもかこのはじまりのまづかつ國よりつたへきてどら
のめいかうめでたまひ「うりやいさいでを流ふぞへすまぬく
せつと言が、りせなかあわせのどこの山とちらむかせてひき
ませまつめつて見てもこ舟のわたしあだなみうのまづら
たれにちぎりをうわしていろをかへて日かげにあさがほの花
のかつらのねみだれ枕はづうししんさでならぬへつくま
つりの神みさんえなせに男いろれぬりにねさつしま山よる
浪のせせていかへするでのうへつゆちるあーの花心二より「月
待つどろのやくらまの宵の月たうくぬるまでまたせてたい
てはどりたをとのうつり香波かたれ月とたのめども水の

月かげぬがしゆくすへの雲まに三日の月戀にくせものしの
ふ夜の軒の月かげかくれてもあまる思ひのいろみせて秋の
むしのねさへわたり、絲やのつささへ枕にかよふをいもりん
くふりつみみはらしや「あめのかげかどれどるさとり
もちへんの木にしゆくしうをいげつかのぬみにふすそのあま
の夜もいまのはやかねもさこへてわけがたのいるさのつきの
かげあしき、つきの名ごりやあーむらん

○一トつよぎ 三下り

一、まへだて、戀のやみかわいというもつたわれてみてふ
かいらうちやましぬれてちよづの水くさきはぬれぬ中じやあ
るまいけれどぬんのかもぬき一トつ夜ぎ

○あまつ袂の白しぼり 本てふし

今もむかしもかわらまらぬだいにむすめのたいひとりねくれ
 みちなる久まつもまたささかゝるむろの梅つよみのはねの
 ふりろでいうちをいのんでよふくどて、でたがいのやく
 ろくいて、ろも海んにすみだ川人目堤の川岸をたどりくいて
 きたりける「わがたまくらに梅が香のまだ床ぬれぬうぐひす
 もてがいの内からごねんをうけたいじのくた主さまもつ
 たいねがらけらいの身「あうめいじつとかを、みてあれまた
 わんねむりいふてろんぬろのよふない、わけをうれよりわ
 しがいやならびひとりみらいへいつてみや男ご、ろいろふし
 たものうちいさい時からなまなかに手ならいまでを一ツど
 ころでなにやらそうへかいたのをろなたに見せてとうた
 ぬばていといふぢといふたのをむそびはじめのどのごじや

ものと思ふているをろのやふなうちみつらみいねにからと
 袖にすがりてなみだぐむ娘ご、ろのかわゆらし「て、になに
 はのまらの名もきいてきをんのかどやしき瓦番町とて油やの
 ひどりむすめのおそとてとしの二八のろるまゆげうちの小
 がいの久松と一のびくいて寐あぶらもれやたちやゆめにも白
 しぼり二人りいつぼみの花ざかり絞るか結たるふり袖のばい
 香のゆきのたまのをのすへいたがいの吉長寺ろてでなな
 種あぶら「いけん交りにきよじけるかを見あはして目のなみ
 だ「今のふたりがつうのまにみだの三國のすみだ川はそらう
 てなのあらせたいいさるとはん都鳥はしどはしづのあけち
 かさはや長命寺のかねの香も「て、にうきなをのこすらん

○交屋康秀

本てふし

といかぬながらねがひきてゆくをやまじとてれまつた「あた
 にくらしいなんじやいなれきと所のくらまぎればんにやいの
 とみ、にくちむべ山かせのあらしほどぞつと身にしむうれし
 さも秋のくさ木のーろくどひとりねとどのあどつらあは
 びのかいもかた、より情ないでのあるまいう「よるをつきの
 けコリヤどふじやはなのせうじへたまさかにねぶかのうほる
 あだつきのじううちがひのふくじるでひとりばかりもりか
 へをしいつけられぬごちろうのソモくおじさいつかまつら
 ぬこれをもへべしやうくが九十九夜く思ひつめかさを
 かたげて丸木ばしやれつとあふないすでのこと花をいされ
 てかたあじのちんがくくくヲ、つめたるのかよひじも君也

へに衣のどろにあかつきのすくかへる浮思ひならぬなが
 さまわが戀のすへつむ花のめうだいをつきつけられてはづか
 しいぢげのおなごのくちぐせに「田まちのむかへ今戸はは
 うめんさまのまもりかねかしてちよきにかいのもちめをな
 がしてすみだ川れとよけならうつちからほういたかまがは
 らのうへのせる手ごとわれとわりにげんとをるをエ、あく
 ーよな戀しを引とむるのをふりはらいイヤくくあふと
 むまつまひ忍ぶてひかごのシテユヒもへまの蚊やよんでこ
 ひきつちりつまつたやにぎせるるくぼのいきのうくばかりて
 れじやもかぬとやすひでがニ上り「ふじや淺間のけふりのたろ
 か衛士のたく火のさわべのはたるやくやをしはで身取がを
 ろふじやへ「あいなえんきえんのあじなものかたときわする、

ひまもななくいつせつからたもやるきになつたわいな「うふじ
やいな本て「はなにあらしいろのじやまよるをこなたへ
やり戸口なかどのさしていろぎゆ

○おとしぬみ 三下り

いづかたへないてゆくらんやと、ぎすまくらのやまのまよひ
みちさくたびく「にめづらしきいつもはつねのこ、ちしてか
あいくのしのびねにつきのなごりやありわけのさつうなひ
たはあさがらす

○京の四季 本てふし

はるは花いさみにごんせ東山いろかわらうふよさくらやう
かれく「てすいもふすいも物「がたいにはんさしでも和らかふ
ぎれんどうふの二けん茶やみそぎうなつはうちつれてかわら

比つとふ夕涼よいく「よいやさ「まくすがはらにりよ
く「と秋ぞいろます花頂山しぐれをいとふからかさのぬれて
もみじのてふらく寺思ひぞつる丸山のけさもきてみるゆき
みざけエ、エうしてやくあのみさふむからい「く「く「よ
や

○夕かろ 本てふし

きのふまで形がめし花もいつしかにさふいわが身となつくる
の日にぞしるる「らき思ひせめてあわれを夕がほのつゆの命
どかねてはしれとしられてはかなきゆめの夜や二上り「うでは
なみだにかわくまもないてあかして山ほど、ぎす「一「うら
にさへわたる月のかいみはてりながらくもりがちなるむねの
やみエ、ま、ならぬしやば世界はやふけわたるかねの絲に迷

ひをはれて死出のたびいろく心が夏の夜にせいろさかたの道のせでてらしたまはれ三ツのともし火

○妖万さび

二上り

一 合やうにかざる軒ばの松竹はいもせをしへのたどへ草「徳若にたまんさいとは後代もさかへてまゝますわいさやう有けるあち玉のとしを二八のわらざかり合はなの糸にしをかうべにめしてしたふ心はなんじやいな合うわきはよろへゆすりはの口にふくみりんきのかづは合二ツ三ツ四ツ五葉の松も手ごどのもつれか寶の君の心合へ合中をとりもつ戀のやつこのきてんに任せて爰らで目でたふひひける合戀の手習ひ合つい見ならいてけふかさだめのいろはには「不うほけきよのうぐひすもはのじをちやつとい、かねて糸がふて、ろりやくをたつ

出雲とやらの神様が結ばしやんした三重のねびといて合ほどいてこちやほづかしのもれてや顔にちるをみじ合酒にまぎらすさいわうい合三六十年たまくと合雨のふれども風の夜も合すれりや千里も苦になぬまつちやうんやくと、ろのまげんのまわりぎにりんぎのつのはしらだて三下り一本の柱はいもせにひえうす天の岩戸の神様もいろにはほんにふかみ草二本の柱に二世かけて三九度は四海浪かたい契りの其中にとりがれしへし女夫もさても五本のはしらには五つきよみ日を見いわた帯むすぶ糸にしのうれしさによるもひるこのねやのうちむつまじ中にや、もうけられから西のみやまいり九本の柱はくれないのぬいのもやうのつると合松竹梅のはでうぶき十重もかさ総ていさぎよくはやすつゝみの柏子どり合ねもしろ

や「はるの野山を見渡せばにしきあやどる梅柳よい中どしの
 いろをらべかりがうちやむつばめがねたむ風もりんきのあ
 ましどふけばいとくかふりにもつれつよれつふんにやなぎ
 のいとしらしじやぬいかいなしはらうや「きみが代のく」幾
 万代をさかへ榮ふるときわ木のいろをかわらず枝をましちと
 せのみどり手にみりあいに相生の松風を枝をならさぬ法代
 なれや百万年の法祝をやわらたのしみ舞納む

○紀伊の國

本てふ

紀伊のくにいれとなし川のみなかみにた、せたもふはせん
 きよく山卅玉十二社大明神さて東ごまにいたりては玉姫いな
 りのみめぐりに狐のよめおにもつをかづくはがうりさ
 なりさまたのめばたまらの袖すりをさしすめこよいはまら

女郎なごどいまつさきまつくろく黒きけいなりにつま、
 れてこまでぬしたる信田づま

○白むやうし

二上り

はるのせに糸がをこぼる、花の山すがたをかふもとりなり
 もひらりばうしの「しどおなく」しはらうや「はつねはづか
 鷺の合まめのすあいをたよりにてとまるばかりうやぶうぐひ
 すの合さいづるこへはるうほけきやうとないてまつよがこち
 やしんさらーつをる思ひをまらにかたるとけてあふよの
 人ころにくや男ご、ろのやるせなや戀の志よわけをかりへ
 うた「春はさくらになつのさく秋はをみぢに冬の梅にはひら
 つろふ女氣ははでなとりなり目にたつむせめ人目しのべは
 ふたつ此道にわさやからまれていつをさようどやみへがくれ

四の苦説をいひ、ちうちのむり云ふか世の面ちあやま七重
八重さくまをのをびとけて逢ふやよのうれさをほんにせ
いもん神さんかけていもせごもよふてふにたわむれて
やぶくさまできたひゆく

○若そふ多

三下り

いちをうにかざるのきばのまつたけはふせんたちはなもん
どころさり、としやんどしめなわにむすびながしのしらべさ
へうたつろちやはるげしきふみこのむ梅にゑにしをうぐい
すのゆきのふうじめうちとけてけろふふみくこゑさへまた
るあらたまのこのおをになひうりみまたす四方にいる
くののきばのむめにはつねをもみうげがはらのひめてまつ
いとねど千代のいろみへてもきげのさにとつむりぬのへ

のさわらびおしはへてみうげがはらにさをひめのあさけを
かへすころあまや春のけしたや本てふしのお夜はあちらむ
うんせれ月さんくいろのせういじやにナアしんさうし
あふたとはついておくれなあけのかねアいろのせういじ
やにぬアしんさうしうらいろはほのぐとあけおくらや山
みるてげにもどけきはるのいろ

○狂まん

二上り

はるのこすへをいつしかうめてむかい小山のろの仇あくさ
ううれくちちりかゝるく、てうのひとくのとい中どしは
きみがまがきの其こひ州にこがまくてひをくるくつ
ゆのとるべのゑんむすふげに戀はくせをのくせものかんぬみ
はさらくさらにてひころぬれぬへうさくものよるべきい

つくし糸いとのみだれてものや、「おもはする風かぜに柳やなぎのねみだ
 れにかかたしくりでの花はなごもうつろういろにせうれてはう
 つして、ろといとみかぬア、うめしのあたあらし夢ゆめのむつ
 ごとあしぬのつゆのねとことばにぬれてかひぬさうさぬたつ
 らん花はなの夕ゆふべのうつりがもれてうらにしぬれぬゆさのひも
 かざしてめうんかざしくさはるかたもとのくちもせでかりやく
 ぬ風かぜのいたづらもたが小さくらやにくからぬかじゆらしか
 むりくちとし、をのめおちやめのともこもともつれてゆ
 くものか花はなの山やまさてみごとにくはなの色いろうろへるれにこ、
 ろをかまどとすする三下り「あのやまみさまはかつのいつからあ
 いもせて沖せきのふねほどこりりやせぬとひはみもせてをあか
 にやあじぬなかぬからすのきぬくはエ、しとでこしく

わけしらぬかみだきみたる、みねの白くもさらくくく
 あなたへもつきてなたるさうひまともなくころみへにけり
 ○相生獅子あひあひし 三下り
 ばなどびてふちどろけとも人しらすわれもまをふやさまく
 のしきたりくくのたわむきはるのもののごとにあられなりて
 うやこてふやせめてしばしは手にとまれかみかへればはな
 にまぎれて見へつかかくれついろくの姿すがたやさしき夏木立なつこたて「こ
 ろつくいのナ此このとし月つきをへいつかおもひの晴はる、やら心こころひ
 どつにあまるやらとしや世よの中なかはなになむれ枝えだにふしをし
 めい、のあなたへひらりこなたへひまりくむらりく
 くくくとまひありふ入りき九くトきのふんじんのらん柏子ひやしは
 ろれでされくも心みだれて足あしもたまさず瀧たきのおどのいたは

ないりもしらなみのこくうを渡るがごとくなり夏のゆうぐま
 に山を見たりたせべれりしも松廬にわをば涼しきふきさるふ
 ばらくはつと鳥のむれいるはとさもころわれひとしをさて
 をおもしろやまたはほど、ぎすかさねに結ぶ卵のはなやぼた
 んしやくやくあつちりなこつふりなあつちりふつありすふり
 もぢりてゑりまりゑんじよの奥山のかげに戀といふ物はたれ
 もしる物をむてふの何者か月もかたむまはのくかねのつら
 やうらめしわかれやまさるなみだ玉ちる朝ぼらけ 人め忍べ
 ばうらみはせまじ爲に しづみし戀のふる心からなる身の
 うきをやんれられはくへまことうやつらやく思ひまはせ
 ば昔なりぼたんにとわむれし、のきよく實にしやつきやうの
 ありさまはしやうがのはなふりしやうやくちきんくご日夏

のくもに開てゆへき目前のきどくゑまたなりしばらくはたせ
 たまへやゑうかうのしせつも いまいまほどにも過し
 、どらてんのふがくのみきんぼたんの花ふさにつひみちく
 大さんりさんのし、がしらうてやはやせやぼたんほうく
 はうさんのすいあらはれて花にたわむれゑだにふしまるび實
 にも上なきしら玉の勢ひなびかぬくさ木もなきときなれや巧
 せい千秋と舞おさめ、の座にこり直りけれ

○新かむる 二上り

このをかのもにはがくれの動のつばみ海どらのねふりなら
 ひの禿ふでいとしどげんやちわぶみもさまへ遣ひの奴だこ
 「あんの糸目のふつ、りどされてどふやらさにか、りをすし
 もとめて跡おふて」アノおいらんのなかくをむすぶ心の

すじに「糸によりくる風み草せり」ヲ、ユウ「こゝいかをすり
 や正月と思ふてかいなばからしいこちやうれしうてまたはる
 もすさぬ中から羽子板を上るり」あきやくにきつとやくうくに
 もふいくつねりや正月と長ひつき日を待かさり十六むさしす
 ころくも「一、二、三、四とてまりつく向ふ通りやる熊野どう者
 のかたにかけたるかたびら」かたするは梅のねり枝中は五せ
 うのううれはし「うれはし」を通る人どてつれてきつれしとり
 ありどれがあねやあいもどな郎やらうれはるんにだてな品者
 「戀じやなけれど玉屋の者らがなれて」うはへてうで引とめて
 れーやはうづされと「た」エ、しらぬはいなこちは色けもな
 いせうのねせは、なれてさいけん山形二つはく身とならば
 あだぬ浮名をしんせつにかへていとしい入さんがあちはて

だの請書を上てみたいの心ど「ちとませ物じやないういな
 「い」うくがいの道中にやのてがやりふるおてをふる振てふり
 こむ大じんもすかぬさやくなふれさく「花のしく入揚やい
 り」どまりじやないうとまらんせこれなく「お草臥ても有ふ
 ならおあしさをつてうの上におねまのねときも上るり」合てん
 だもてこひする引べい哥「岡ざき女郎しふく」にとんばま
 つた上るり「あやのいけんく」でも「ぬるくぬつとも上るり」夜
 のまに通ふて「くせつしまふて明うらす哥」うづれかどらぬい
 ろの道ぐさ上るり「あだどう」氣にのせられしと風がりんさの
 聖の花てひのさうりと三ツ扇

○正月娘

本てふー

根ざ、野にすむひばりの山にまださ、なまの鶴もやぶに初

春のはふはんにあふこの眠るに幸ひといつとも正月はどのてや
 威様神様 山上さまちとつふでもさかぬ氣のそれ法存しの
 おてんば物と遊ひにはけてきたりけり色の戀のといふるを
 ちぬとてにぐらしい戀といふ字のいづくでも田舎でいはい
 瀬戸明て忍んで逢てエ夫うらの深いゑにしと言ふの譯の聞ど
 も耻かしいおなぶりならばお添けこらや夫よりも春遊び一寸
 たもどのてまりうた一トツトチャンエ一夜あぐればにぎやうで
 く飾たてたる松かさり門にとりおひ三味引連て 明の春本
 にはんどに見るエ二上り「さまの松の木な私やすくな竹やがて
 や、もうけ其子の名をば梅と付たなりや松竹梅じやないうい
 なさいなく、う、うれしく、うれまことにはんにあふんばい
 かつうふのよいく中としじや有まいう「れも、ろや春の物

とてにぎやうに鳥おひ万歳神樂じ、さかへさうふるみよなれ
 や

○あび源太

本てふし

いはずともろれど、れうし三ッ大の紋日ひうらのやくろく
 も引のうへさじ二度のうげ梶はら源太うげせへい 坂東一の
 わか武者と皆人ごどもふべからけさきぬくの中の町みる
 を揚やのけん酒にかつてかぶどのを、しめてみてむすんで
 ひ付けてふりかたげたるむめが枝の折をるびらの太夫まよく
 てんとたまらぬ花の顔みせはや咲のゑがをもよしやあしもと
 もよろしくものであもみくる詞「エ、まかりいでたるものい
 梶原源太かけすへと言のら者にていサイヤ何じや身共にいく
 たの断せいア、はなうふともくまづいくたのもりのかつせ

んの「さるほどに」へいけのぐんせい十万余騎一のたに、どこ
もりける味方のせい六万余騎のり頼よりつね両大將二にて
分れておしよするその時かけ季思ふやふ色にいなまし何れぬ
いじやほ一人ささかけ高名せんと駕にも乗す只一騎生田の
もりのさくならで神崎へとぞさしかゝる。新造りむろくわ車
仲居あつはれてきよのがすなど八さが中に取込られ頭巾羽織
も打おとされ大わらいの姿となりつい深入のおく座し「待
もふけたる梅が枝のそれと見るよりむなづく「コレなんぞい
のふ源太さんお前といつたいかうなつたのみなたいいてい
かいな初のごげんにはれたさやくどこへもおそふ行はづを
座のまへも何のそのあすなぶらりよとほ、にいてこゝろてや
ばなどていりささごきもわさへなげ嶋田まくらの下へやるて

さへつとめぎ放ればかましい女郎めうがに叶ひ「どたの」む
めしをふりすて、「よその二階へ行かふどのなんば剛者様
じやて、さづよい男と取つけの「取てつきのけ大音上ヤアぬ
かしたり猫けいせいそのて、是までかきのめされ真うけにの
りぢてそ、りぶ「たてくふ虫もすさく」とやらことしやか
ぼちやのあたりとしなぞとやつたも氣はづかしはき出れぬ
うちこつちからさり上あげかいちよんくまくどりやあいと
まどたちあがれの「いやくいなさぬいやらぬると「せりあふ
中へ「若いものア、もしくこりやとふてごさりますずわたし
が思ひわぼくの田町の法印さま「うさにうさたはかけすへい
かつ色みするゑひらの梅枝がへねやの早わざぶんどりを生田
の森の高名とかぶさのさろくにどいめけり

○安宅の松

本てふし

族たぐひのころもはずいかけのつゆけさうでやまほるらんみやこの
 はかの旅たぐひのそらさもはるどつこしぢのすへおもひやるこそ
 はるかなれうまの、めはやくわけのけいあさぢいろづくあら
 ちやまけびのうみやいひさしきかみかきやまほの木めやま
 なを行さきに見へたるいそは山人のいたどり川かわせのみづの
 あそぶづやすへいみくよのみなどなるあしのまのいらなみよ
 せてなびくあらしのはけしきはなのあたかにほきにけり
本てふし「をちばかくなるさとのわらぐの野邊のべのあそびもよね
 んなくこりやたがめづさちや手てもちやか何なにらのはちんが
 ぐぐちんがらこはまりぐぐつらとさへぐぐのわさ
 かやのあとしてあそぶるはあ、かみまつねあ、まがたに

せらとど、やか、にらわふよらうたらたいまかそつてくりよ
 はどしのぐのつしまのかげニ上のぼり「うちのなアうちのせどや
 のこと一竹たけふへにきうものくさふへにふへになりたやまの
 ぶ夜のふへいおもひをくちうつま、ぐまよんがいなく
まのぶその身みはあたかのまつよまの夜のまをかせに
 もまれぐてたちつぐいあれしてこれしてまよんかいなあ
 もしろや「たへすやぐ手てだから一ひとにせんごくよねぐらひ
 だちのくにのつのもりにこがねのはながさいたよさにつこり
まはつこりあわらひめいたいまつからさいよのまよま
 やうやどのだんぐら、つからぐらつかいたわらに酒さけたる
 せんばいまんばらぐまんぐばらうつておけまやんぐ
まのすまはまやんぐぐとさつてもそろふた子こだから一と

六十四

比どへばおとよけたよ辰松ゆる松だんだらいさごにかいつく
ぼうひつ、くぼうかいつくひつ、くまやんく扇あふぎになじむ
風の子や風の木の葉のちりくりに里をさうてぞ「ゆめくう
たがひあらいそのまさごをどばす土つちけむり梢こえへこのはもはら
くくりにかに吹くるはゆち風天地も一いちどにめいどうして
● 岩石古木ゆさくくどろくどつと山嵐やまあらしのかせが有ぬか
そのすかたみ失ふてぞたちける

○はな車

三下り

ひけや引けくすがたもまもの花はなくるま白しろくれないのそめ
手すなまやんとさなしとこいかさありのゑばしかり衣ころも男おとこま
びせりつ、とうたけふ今やりれことぶきをいはひかさなる三
つ扇あふぎそのまひあふき手もたゆくげにせんだんひふたばより

七十四

舞ま「冬ふゆなかばに山里やまあたをみわたせのこづへの霜しもか雪ゆきのはな冬
じ乃のまめの魚いさなざかり合あかをりゆかしき花はなのそであなたへい
り合あこなたへひらり櫻さくらにまかふ雪ゆきけしきはつ戀こひ乃人目ひとめはづ
かしはなもみじまのふ山のまたもみじうすいのひやよ戀こひてる
も結むすふ糸いとにし神かみさん此こゝお仲人なこうどでないかいなこよいあふ
ど此相圖あひづはなんぞつまとた、かいたをもいはであけて霜しも
よ此堂このどうつごともたい心なき鳥とりが絲いとにいと、思おもひのますかみ
あわせか、みのひよくもん「たまたれ乃うちやゆかきさ所ところ
車くるまそれへくふでに思おもひを多車あまくるまへんじうつくしきはな車くるま合あ
るりくくるくはな車くるまつるよの通とほくるまやゆき車
ろれへくまはぶ車くるま此こゝみどわれ扇あふぎ車くるまや戀車こひくるまくるりく
くるくこひ車くるままはらしやふりこめくはつ雪ゆき此山こゝのやまに見事みごとな

花^{はな}此^{こゝ}を^をり^り合^あふ^ふりの^のた^たも^もと^とに^に戀^{こひ}か^かせ^せが^がよ^よれ^れつ^つも^もつ^つれ^れつ^つち^ちら^らく^く
く^くと^と合^あさん^{さん}さ^さま^まど^どれ^れに^にぬ^ぬれ^れく^くそ^そめ^めて^て合^あそ^そろ^ろふ^ふや^やり^り此^{こゝ}手^ては^は
ない^{ない}山^{やま}か^かざ^ざり^りた^たつ^つた^たる^るだ^だて^てな^など^どり^りな^なり^りた^たい^いつ^つま^まで^でも^もこ^こ此^{こゝ}ふ^ふ
たい^{たい}か^かわ^わら^らぬ^ぬ花^{はな}此^{こゝ}か^かを^を見^みせ^せや^や所^{ところ}は^はん^んじ^じや^やう^うか^かわ^わら^らさ^さき^きに^にぎ^ぎあ^あ
ふ^ふ代^よ代^よ此^{こゝ}さ^さど^どか^かぐ^ぐら^ら千^{せん}秋^{しゅう}万^{まん}せい^{せい}万^{まん}く^くせい^{せい}と^と合^あた^たか^かに^にこ^こそ^そは^は
ま^まい^いお^おさ^させ^せ

○晒女落鴈

八^はら^らい^いの^の内^{うち}
二^に上^あり

と^とめ^めて^てみ^みよ^よな^なら^らち^ちた^た絲^{いと}に^に小^こ蝶^{てつ}梅^{ばい}に^に驚^{おどろ}ま^まつ^つ此^{こゝ}雪^{ゆき}さ^さて^ては^はせ^せな^な女^に
が^が袖^{そで}た^たも^もと^とま^まよ^よん^んか^かい^いな^な合^あい^いろ^ろけ^け白^{しろ}は^は此^{こゝ}團^{だん}十^{じゅう}郎^{らう}娘^{むすめ}つ^つよ^よい^いく^く
と^と名^なに^にふ^ふれ^れ一^{いっ}お^おか^か絲^{いと}が^がう^うは^はさ^さ高^{たか}あ^あし^した^た哥^{あは}ま^まだ^だ男^{おとこ}に^にあ^あふ^ふみ^みじ^じ
や^やさ^さら^らし^した^たら^らい^い此^{こゝ}た^たが^がな^なぶ^ぶら^らふ^ふと^と戀^{こひ}じ^じや^やい^いや^やく^くす^すも^もふ^ふて^てな^な
ら^らば^ばわ^わい^いて^てあ^あら^らわ^わず^ずわ^わた^たり^りあ^あい^いあ^あり^りや^やり^りや^やく^くく^くよ^よい^いや^やさ^さ

上^ある^るり^り「四^よッ^つに^にた^たか^かれ^れて^て手^てと^とや^やら^らで^で二^{ふた}人^{にん}り^りま^まつ^つほ^ほり^りあ^あせ^せか^かい^い
て^てな^なげ^げ此^{こゝ}な^なさ^さけ^けの^のど^どり^りく^くみ^みが^が哥^{あは}れ^れも^も一^{いっ}ろ^ろか^かる^るで^では^は上^ある^るり^り「な^ない^い
か^かい^いな^な哥^{あは}ち^ちか^から^らた^ため^め一^{いっ}ろ^ろき^きよ^よく^く持^もは^は上^ある^るり^り「石^{いし}で^でも^もご^ごん^んせ^せ哥^{あは}た^た
は^はあ^あで^でも^もご^ごさ^され^れく^くに^にさ^さし^しき^きつ^つて^て上^ある^るり^り「五^ご十^{じゅう}五^ごの^の何^{なん}の^の其^{その}中^{ちゆう}
此^{こゝ}字^じさ^さめ^めし^し若^わい^いし^しも^も女^にに^にや^や出^ださ^さぬ^ぬ力^{ちから}て^てふ^ふ哥^{あは}は^はん^んに^には^はう^うや^やれ^れ
あ^あふ^ふ夜^よは^はあ^あわ^わし^しあ^あり^りを^をみ^みか^かみ^みの^のふ^ふみ^みさ^さへ^へ人^{ひと}目^めせ^せき^き乃^のま^まみ^みづ^づに^に
心^{こゝろ}は^はぬ^ぬれ^れて^て上^ある^るり^り「こ^こよ^よい^いか^かた^た、[、]に^にお^おい^いそ^そ乃^のも^もり^りと^とへ^へん^んに^に忘^{わす}れ^れ
ら^らさ^さま^また^たせ^せて^てね^ねい^いて^てま^まだ^だあ^あと^とじ^じや^やと^と心^{こゝろ}で^でわ^わら^らい^いう^うそ^そを^をつ^つく^くま^ま
の^のあ^あだ^だに^にく^くら^らし^しい^い「ふ^ふけ^けて^て今^{いま}ご^ごろ^ろ三^{さん}井^い寺^{てら}は^はど^どこ^こ乃^の田^{たの}上^{うえ}と^とぬ^ぬく^くさ^さ
つ^つて^て合^あ合^あま^まさ^さめ^めが^が非^いの^のと^とこ^こ乃^の山^{やま}上^ある^るり^り「こ^こち^ちの^の矢^やば^ばせ^せ乃^の一^{いっ}す^すじ^じに^に
ほ^ほん^んに^にあ^あは^はづ^づの^のか^かこ^こち^ちと^と思^{おも}ひ^ひ大^{おほ}津^つの^のは^はつ^つ秋^{あき}に^に合^あい^いか^かい^いみ^みの^の宿^{しゆく}
の^の盆^{ぼん}れ^れど^どり^り「天^{あま}の^のか^かわ^わは^はし^しの^のち^ちま^まり^りも^も岩^{いわ}橋^{はし}乃^のあ^あく^くる^るわ^わび^びし^しき^き

かつらぎの神ならぬ身すへかけてよいやなく身せい一の
 上もかさぎろはしからにたつふへ竹も一夜きりどりきくつ
 ちさ八てへの鳥にせかれてはよいやなく上り「たきどの
 姫のうつり香を結まきながら乃上り」たきわかれ「よいやな
 く哥「さ、の一夜をるん堂すび上り」のちの玉川はぎこへて
 いろわるみづにさらしはや哥「さらしてふりを見せまいりせ
 うく哥「たつ浪かくせいのあじろにさるられてあがる、
 水にせきとめよく合さつさ車のわが切てくいづれたもひ
 ほどなたにもくさらす細布手にくるく」と「さらす細布の
 手にくるく」といさやかへらんまつがいほりへ

○汝くみ 二上り

上り「まつ一本かわらぬ宮の印にとて今もさかへに在原の

「かたみのるばしかり衣きつ、馴にしれもかげを 上り「うつ
 しるじまの浦かせに哥「ゆかしさへてもあら涙のよするなぎ
 さに世をわくる「いかに此身があまじやといふてまんきく
 に袖ぬれて「いつか嬉しきあふせもと君にやたれかつげのく
 へさしくる泣をくもふよくみわけて哥「みれば月こそ桶に有
 上り「是にも月の入たるや歌「月の一ツ上り「かげは二ツみつ
 見あれつも雲の上へ、は鳴尾の松かげに月をになふて休らひ
 ぬ 上り「見わたせの面白やなれても須廣の夕まぐれすなとる
 舟のやつまつし合なみけだて、友呼かわす「はんま千鳥のちり
 やちりくちりやちりくばつと鹽やのけむりさへ歌「たつ
 名いとはで三トせのこ、にすまの浦わの松のゆきひらたか
 へりてわわれも小かげにいざたちとりて合 ちなれ松のなつか

「や歌」かたみこり今はわたなれ見初てりめて「逢たりのとき
 やついでろび絲の帯もとかいでりれなりに二人りがすりへか
 り衣をかけてぞ頼ま。つごどに可わいからすのエ、何じや、
 ら泣てりかりよか笑ふて待かまては「こんどのやくろくを忘
 る、ひまは」ないわい「な」りれから深をい、かひしまの水も
 、らさぬ中うは歌ぬれによる身はかさ、してごばんせ人め
 せさかさいつわほがさと。ほんに也び折るの日傘まつになが
 るのまんさらしうれへく。氣をもみじ傘まらはりのどのごよ
 みさはたてがさを相合傘の末かけて。せいもん眞實つまあり
 傘といはれたら思も開くはんな傘「まはら」やいとますてか
 へる浪の音の。すまの浦がけてむらさめと聞もけさみれが
 松風ばかりや「のこるらん松風のく」のうはさはよ、此のこ

るらん

○俄獅子

二上り

花とみつ五丁れどろかぬ人もなしなれもまよふやさまぐに
 四季をりく。のたわむれはるんび物日のかけことば。てふや
 こてふの禿にわか。のううれま、見かへれば花のやたひにみへ
 つかくれついろく。のすがたやさしき中の町。心づくしのナ
 其玉すさもいつのわたさん袖のうち心一ツにねもひぐさよし
 や世の中。「くるひみたる、めじ、れじ、のあなたへひらり
 こなたへひらりひらくく。まのびのみ絲か、さねやくま
 ぐらの岩またさつせのさけにうかれて足もさます。よろの
 みるめもまらなみや「ヤアあさの最中の月はたけまらふけて
 わふのがまぶのさやくヨイ」迂うら見事くりかへしなせこ

四十五

のやうにわすられぬはずかしいほどぐちになる「トいふちや
 むり酒さけになんでもこつちのまちびとこひのナア戀こひのやまやが
 どうふにかすがいさまりのないのでぬらくらふわつく虚うそばか
 りヨイ／＼ヨイヤナアよいから待またせてまた行ゆふとはエ、あん
 まりなどひさ立直たぢぢししめろやれたんだらてもうてうつはたい
 こかとりもちがをかきねてうらむくせいとさりに合あわかぐら
 うはならすこしのびたどはやされてちん／＼かもの床とこの中なかた
 ん／＼たぬきのうらぬいりつめつたあとのゆかりのいろにう
 つてかはつた中直なかぢぢりこいよいこへかけやよいやなしともな
 や三下さんげり「人目ひとめさのぶはうらぢやくにためになるのをふりすて
 とふかくまづみし戀こひのふちこころからなる身みのうさはいつろ
 つらいじやないかいなあはぬむかさがなつかまやっ」

五十五

にろひてやたわむれありぶらきたついろのむらかりて夕日は
 なさくさとけささもくせんとさせんときせんうつつなりまは
 らくまたせたまへやよいのやくろくいまゆほどによもふけ
 じつ／＼「しととらでんのぶがくもかくやいさむまつしやは
 なにたわむれさけにふしたいさんちらきさみたちのうてやあ
 るんせんせいせんせいのくわうさんのさどくあまわれてなびかぬくさ
 木きをなき時ときあれや千秋萬せんしゅうまんせい萬まん歳さいとあたかにしゆくすし
 はかし

○浦しま

三下り

「海原うみはらや浪路なみぢはるかど夕ゆふなきにたつの都みやこを出沙いでしほの合あよまるも八
 十やじゅうの浦うらしまが合あ跡あとに引ひる戀衣こひころもぬる、を夢ゆめどかういろにのり
 路ぢの海うみのふなうたや沖おきの洲崎そさきに合ああまのをぶねが誰戀風たれこひかぜに

人^{ひと}りてがれてよんやさゆたのためたにしとんがいないそべは
 なれて木曾路^{きそじやま}山ねさめ心^{こころ}にたどりくる「つたへ聞^きよもぎれふ
 なる島^{しま}の名^なのふしや^や老^{おい}せぬためしとてかたみの箱^{はこ}の玉^{たま}くし
 げ「二ツ枕^{まくら}のむつごとを思^{おも}へは心引^{こころひ}されて我^{われ}つり針^{はり}のいと
 さを忘^{わす}れりよものと見^みかへりの里^{さと}も山路^{やまじ}のはるの色^{いろ}「かすむ
 こすへのうつりがちりてはなや戀^{こひ}しきおもかげをさつとふ
 さどくはる風^{かぜ}に霞^{あせ}がうめる初^{はつ}さく花^{はな}の色香^{いろかほ}にいうつりさ
 な「柴^ちたねのてふをつゆの床^{とこ}ひよくのてふのよねんなく羽^う
 かせかはしてひきりくくるとまひありふ雪^{ゆき}かさく
 ぬかはなのなみ「うつ、しき浪^{なみ}いくよか戀^{こひ}になれしあさけも
 今^{いま}ではつゑやひとりねをほんにおもへばさりとはく昔^{むかし}こひ
 したなみまくらさだめなや「げにや七^{なな}世^よの浪路^{なみじ}をこへてよ

もきが浦にうらしまがつきせぬちぎりをかたる家^{いへ}すと

○紅葉がり

物^{もの}ねもふたちまふべくもあらぬ身のうでうちふりし心^{こころ}までう
 つろふあきのいろみへて此身^{このみ}をなんとおもふまぐれ^{まぐれ}まぐる、
 空^{そら}をながめつ、うかれいでたるみねの木のくさはもとも下に
 もみじ「夜^よまのつゆやうめぬらん^{此^{こゝろ}あいたおも}ろやころは長^{なが}
 「すへつかたもものこづおもいろく^{に錦^{にしき}いろどる}山^{やま}山^{やま}はは
 なのふいきのそれならで五色^{ごしき}の雪^{ゆき}どふるもみぢわけつ、行^ゆや
 ますらをのやたけて、ろのあづさ弓引^{ゆみひ}やあるべのこまの足^{あし}な
 み谷川^{たにがは}のながれたへせぬもみじ葉^はをわたらは錦^{にしき}中^{なかつ}たへんまぐ
 れをいそぐもみぢが^{此^{こゝろ}間^ま}「見^みすてたまふかつれなやとた
 もとにすがり止^{とど}むれば^さすが岩木^{いわぎ}にあらざれば心^{こころ}よはくも

引どめられて、所は山路のさく酒をむやながれのうき身に
もいとしかわいのよい殿御ふりやんにたまへをたがだいて
ぬるてもみちいろみくさよその戀ぢのねたましや「抑や誠
がつもほど有ば二世も三世も神かけてわさる、ひまはないわ
いな「ふかいゑにしも月に雲花にあらしの戀すなる月のさつ
ささす袖も雪をめぐらす舞の曲「秋のこのはの色に出し紅葉
ふむ鹿にくだいといへど戀のふみかくふでとなるかばゆらしい
じやないかいな「秋のちくさの色に出し菊とす、きはよい中
なれど霞かしらせてぬれをしるかはゆらしいじやないかい
なア、うらやまし「今までこゝに色有女たちまちけしやうの
かたちをあらはし紅葉のこすゑもくはゑんとなつてこぼくて
のはもさらくくめさましかりけるしだいなり

○浅くさ名所

本てふし

はなの浪かそみの衣はれきしてげにもさだかになぎのそらの
どかに通ふ舟の道ゆたのたゆたに引かれもまはんにわた
が身の上をいわばかたきは衣くの身をまる雨のふくさあひ
結びすてたる浅くさのまだ名所もまらひげや身を吉原へう
さつとめ秋葉のもみじいろ見へてかゝみの池や向じま合たし
なんぞみてもゑもん坂いつみめぐりと大門のゑんのは「バも
有ならばうれしの森や花うわどいをさきこして隅田川二ツ
ならべし枕ばし合その首尾の松ち山そふて身のあとわけくれ
にはほんづ、みの神さんへ無理な願ひも戀のちへ浅じが原じ
やないかいな合これ程にむねのやみ色をもかをもまる人を
せめてうらみて梅やしき泣ている春やむすぶらん

○犬かみ

三下り

そふよふたるく、とかんひにのせられてけんびけんていおの
 づから此身に受てあさましやわれもほくとをはいしては心の
 まゝに姿ねもうつすやいけの水かみみかづ玉もにましけづ
 り其つうりさもたちまちにらんじやの香のふくいくとかほる
 におそれ本性を見るにはさもしのばれずやかんのかたあ
 らはせしはかなのおのが有さまやのすへのくさのほがまれに
 くづのうらみのうらめしく親のかたさをうつつにも夢にも忘
 れやるかたもないてあかしてくよくとこがれてもゆるさつ
 ね火はほむらとなつてさりやらんぼんのふの犬のいにせんさ
 づなにつなぎまとはれてふして見ねて見しうじやくのなをさ
 りやらん思ひによりとめりくと里の子にはやししたてられし

つぼりとつゆのかごとのまさまくま。一人むぐらの床の内ね
 むるとすれど犬つかのちやつとあき立身をふる尾花こなたは
 尾をふさねらいよりよせじとたけれとびのひてしんいのつる
 きふんぬのさばとぎたてくいとみあふ親のわかれの其場よ
 り所定めぞうろくと戀にもかしいさながらに人間より百倍
 倍の思ひかたなる胸の内仇もむくひもしらま弓犬あふものや
 ねづみわなか、るもいらぬるゑに引かれくしてさはいへ親
 の恨みのしもとさくをおつ取打てか、れば寄付す貞女を守る
 張然犬陽清貴信が犬とてもかくはあらじとみ、さか立はゆれ
 ばさけんで出むかひおつくかへ其風いいのふやれわがふ
 る里へもどろやれその名玉をど立か、るをよりかたやらじと
 引留る千枝さつねがかへりざさ姿の花やむつの花さごどのほ

なの顔見せばたでたかりけるしだいなり

○高砂丹前

次第「今をはしめの旅衣く日も行すへぞ久しき二上り」高砂や
木の下かげのせふと姥松もろともにわれみても久しくなりぬ
住吉の此浦舟に打のりて月もろともにいで汐やこれは目出た
き世ためし「老木のすがた引かへてもせわりなき女夫松は
いろはおなしふかみどりみれども思ひのつきせぬは誠なりけ
り戀衣げにこいはせせもの「たとへ萬里はへだつともしたふ
心はそりやいはんすな朝な夕なにそら吹風もあちば衣の袖
ひさまとふ思ふどのはつれなの身にしねぐらに殘るわだ枕
「さても見るになアふつてふりこむ花やりはゆきかあらぬか
ちらくちらと白鳥毛ふれささいではひらく合たい

がさたてがさ戀風になびかんせすんくどのばしてしやん
どうけたる柳ごり合品やり振やりながまめしはかわらさ
のいろの宿入三下り「松の名所はさまくにあれ三保の松羽衣の
松にかけたる尾上のかねよ合相に相生ふうふまつ中にみどり
のいどりらしさの姫小松二かい三がい五葉の松いまよかさね
ん千代見ぐさまぼらしや「にしのみあをさが原のなみまより
あられれ出し神み松にふりつむ雪の朝かんうた玉もかるぬる
さしかげのうたい「せうこんによつてこしをすればふとせのみ
どり手にみたりさすかいなには悪戸をはらひ納むる手には壽
福をいだき入來るく花のかは見せきせんのためと袖をつら
ぬてさつさほの「こゑでたのしむらふまよや

◎馬のり

本てふー

あら玉のどし待わびてわ目見へを松はちどせの色かゑぬみち
 はすくなる竹のまぢ梅の浪花へはるくどくわの音のなり
 駒がぬいいきぬがふもろたづな「それ駒に三々の禮義有陰や
 うのむち五々のくら合銚あひふんばりをふひとちらりとかを跡引
 く合せ駒ならば詞葉に世話も合七あぐさなすな合柏子とり合「たり
 からふ、へさのふけふ合江戸からわいて日數さへ十日戎のも
 とり道」とわれて何と浪花がたはなめづらしい目見へに合て
 、ろいそげと海山さかに合どまりく合の去とはながい合朝は
 驛路のすいなり駒に合のたてへ飛まの直に竹にむらがる雀の
 親子どもに願ふや合れどりたてひとへにたのみ上まくや出合
 がしらのむすこかぶひまに引かれぬ駒はくし「先やたかれが
 いかめしく合すも恐れあり明の月毛の光り有がたき合神のに

はひくまの白姫のけはひ粧ふかさり馬合きやいやには何りり
 柳やごし水うにうめらふ合かげの駒こイヨ畜生めとむちわたりや合か
 をはさまらに盛りの花トこ、ろなくしてエ、合つあがりよか
 くらふ栗毛もすいたどふ合中を結ふのさかづきに「エ、酔た
 く五人の中で小町一人は僧正へんじよのめやうたへや合座
 もいろみへてうつらふ文屋がはら吹つらにどふかて、ろに在
 はら殿に思ひ出したらまつくる黒主合りやうけんならぬと合は
 らぞ辰己に世をうじやまの喜撰茶にしてちやとさなせへ合ち
 よいと摘合ちや洗みの小うたぶしニ上り「あはみさアこれ五郎
 さん殿にはの鳥やめんこいなサツコレく合かわい男のヤ合ンレ
 めをさます少々かんらくともなんばん畑でやつてたなコレか
 れ木に花が二度咲か合權兵衛が茶やまで三里ないぞよこひと

てこらなけりやかづさ張子の馬にのりの曲段こりけたて、
はしりゆく

○正札はさし押摺 二上り

うれいろ山をばふくもきりやたい引まくのはつがすみけやぶ
るせいはなるたきを合のぼる鯉龍の如くにて曾我の五郎時宗
の「さかおもだかのおもよろひかるけに引さげかけ出すは目
さましくも又見へにけりもすそにまのかり小林が合手をかけ
ゑばしつる此まる左右のひげに天津風をもなくやらじと力り
やうに引共くうごかばこそ時宗わらつてふりはなしいらぬ
うでだてとしやその力からなくともりりや行かぬ仁王たちな
るいさはいは草木もなひく鬼神やねにをあさむく小林も今は
心をやわらげてコレモヨレ」やばな力はわくの間のうはさらし

さのまんきぶし女子のぐちなまんじつがどいかぬとかまつ夜
半も「ふどんがさねてまきたへの枕の十俵けせふがみまぶに
あふ夜の力水も、らさぬ中の多すまび一人目をせきのうき思
ひたばこはうきをわすれぐさけふりまらべんふじあさまうの
どのぞいてアさニうのママかははにくらしやといふてはま
たもとりついでゑいやくとむけどもあせどをこりやどふじ
や「朝日奈力はそれ切か」ム、エひげかためし力てぶあとしや
せぬかとなでぬは「引にとまらばこらへて見上エ、サく
く」べつろくふみまめ時宗はときこりきたれ嬉しさよ合かわ
づのこへも身にぞしる今やれりしと夢の間も合忘れぬち、の
あだがたさうたんす物と、ひ上り合はしり行んとする所を又
もやらじと引とむる「コレマツタとめてとまらぬとむり酒にさ

づとい朝のむぞりごと、何じやいなあかしやんせかたに
てぬぐひろめもかまはぬ江戸じまんかまひ丹めうでんすは
でな所がわしやうれし、とまらんせいさましや「たがひに
あちそふいさほひはせんだいみもんどうせいぶそふかうたい
むにのひやうばんはあづまにならぶ二見かたこ、にうつ
て神風やめくみもふかく若武者ときせん上下おしなへて、怒
れぬ者こそなかりけり

○濱の松かせ

三下り

あわれいにしへを思ひ出ればなつかしやふなじのどけき海は
らや四海の浪を汲てゑる見れば月ころ桶に有月は一ツ影は二
ツ三つまほのよるべになぎさにたちいで、いざやまほを汲ふ
とらなれ松葉の夕けふり三とせはこ、にすまの浦よせてはか

すかたを涙りれはゆきひらさん待あかし涙にたいよふ捨小
ふねこがれてみたるかひもなしま何はつらひとみなれまやん
すけれども十忍び待夜はたのしみにまめてねまつと二葉の松
の中に小松と思ひしにうれしくくろふじやへ松にういぬの
何たかづらまどふ心はなみなもど、かり宵やいのと多かきの
もとまゆびを見合せあふ中臣のもはや夜半はごん中納言さ
まにわかればさか上是則さんへの心中だてれふよいことの
く「恨みかほにて何にもいはずみぶのたいみはきををはる道
のつらきうき身にねふ江の千里たどへどなたが水さるふども
ふかひるにしはあり原のなり平さまへの心中だてれふよひこ
とのくろなれ松のなつかしや松にふさくる風もさやうじて
すまの高浪はげしき夜半の山れろくさちりくく

七
のどりのこゑに色めもあとなく夜をあけて村雨やと聞し
もけさ見ればまのかせばかりやのこるらん

○秋のまらべ

三下り

ひ葉うる梢の風に秋うめて紅葉のはしやわたすらん夕陽を
でにみづからかけをどめし立田ひめさきりかまがきに錦の
衣ぬれてや袖のてりろふるもするまばゆき夕がすみ色こる
のべに咲はなの名も七ぐさのかわゆらしなはながもとに吹
風がうのど身にまむ戀草もまたま、萩の女良へし「花の姿が
目に月かけに男へし露まらかねてぬれからるあぎのうわき
なきやう共まらで色香のにくやアヲ、「憎やかるかやわれを
かう思ひ初にしていごころも色もあだなれうも紫のふしはか
まのいはこるび糸すさ」よはのあらしのまに花のな

びく心が合はらしや池みづによるく月の通へども岩に
せかれてれち合ぬ田舎のそらやくまもなき三下り「三五の月
のかげさへて今宵ぞ秋としられけり」しのぶ其夜にナアさへ
たはきこるゆらやしんさや合心なややみになアはま戸をよふ
くと明のわかれのなをつらやく二上り「しづが手わざに
柏子さへ月のかけらの鏡やまうのせばかげも田ごとにするま
のうら山しまをながめ明して三かさ山こし路に雪が三吉の
此花のさかりも及びぬき秋のながめぞたくひなきく

○石楠

二上り

一十七
天くたる紫雲の小袖糸竹のこゑもみにしむ雪のてり「三五の
月かるれならぬ二八十六で多のけられて四五の廿なら一期
に一度わしや帯とかぬらんさへ花一トさかり櫻どき「ふみ月

のろしのあふ夜をうらやみて寝る思ひをはたるがりうちほの
 風もそでふきてれもしろいじやないかいなサア、そよとすいし
 きゆるぐれにたよりわすれずくる人を云は心に待乳山あふて
 恨みの竹門をいふたらむねも隅田川あもしろいじやないかい
 なサア、いなほひろいでかりがねふたの女夫くらすが中たん
 ば、土手の夜風がれんじもれきて山谷でかまかにかみきぬた
 、そやあんどのかげふけて玉姫あたりのきつね火もちらく
 とみへつ見へすひけ四つをきたらまふりひる来しやんせうら
 定めなき一ト時雨清涼山の床の山重るふとんが、としていく
 へいわをの重ねよさうらた、けふる谷のきりげにおもしろき
 けしきかなし、とらてんのぶがくのみさん牡丹の英句ひみ
 ちうぐたいきんりさんのし、頭打やはやせやぼたんぼく

たうきんのすいあらわれて花にたわむれ枝に伏まるびき
 かへなきし、王のいきたひなびかぬ草木もあき時なれや萬歳
 千秋とまい納めく、獅子のさにてそねをりけりく

○あちご獅子

うのやたいこの音もすみわたる角兵へくとまねかれて居
 が見せる石橋のうさよをわたる風雅ものうたふもまふもは
 やすのもひとりたびねの草枕おらか女房をはたるしやないが
 ま、をたいたり水しごとあさよるたびのたのしみをひとり
 みして来りける「越路がたお國名物さまく、あれどいななか
 まりのかたことまじりしらふさぎなることのををかりたより
 と、けてはしやおしやちいみのどてやらが見へそく國のなら
 ひにやゑんを結べはあにやさん、兄しやないものつまじやも

の「くるか」とそまへ出て見れば、ウはいのはまの松かせ
れとやまさるさゆとかけのはいまつかどな「そいた水仙をか
れた柳のはいの心せきちくさをもみぢサやとかけのすいまは
うとあ「しんくぢんまもあけさぶしなんだかくちたへぼたん
ほもたねどちごのし、はれのがすがたを花と見てにえにさ
いありさかせたりろこのおけさにいなこといはれねまり結ま
らすまちあかすごされはなしましとこんままつ此まが考て松
のはのこにこんこまやかに「ひいてうたふやし、のきよく
「むかひ小山のしちく竹いたぶうろへてきりをこまかよ十
七がむろの小口にひねねして花のさかるをゆめに見ては「見
わたせば「西も東もはなのかはいづれにぎわふ人の山く
うちとする「女なみ男浪のたへまなくさかまく水のおもし

ろや「さらすゆるぬの手にまるといさやかゑらんれの
がすみ家へ

○夜さくら 三下り

よさくらやうかれがらそがま「と「はさのこかげにたれ
やらがいるわいな「とほあさんそなめぶさやなぎにかせにも
まれているわいなエ、ふわり「とれふさろふじやいなア
ふじやはいなア

○水のでばな 本てぬし

みづのでばなど二人が中「せかれわれぬみのいんぐりた
どへとなたのいけんでもおもひ切さ「エ、ないわいな

○熊さか 三下り

くまさかやなぎなた「づさん「がんとふものみの松替さてみれ

はま、いげに千代おけて人はのりつねわたしものりつね

○桐のあめ 本玉ふり

さりの雨合か、りし袖のぬれつばめアレみやしやんせ鳥でさへなれしところをふりきて、合しらぬ合たこくでくらふしてや、をもふけてはるく、とまきよふへかへるたびのそらエ、しほらしいではないかいな

○種まさ三番叟 三下り

どうく、たらりく、たらりあかりたらりとふ。ちりやたらりし女子たらしの目をとにとんとうちこんでふみはぢづかにれとべどもいなせのないはさりとはくしんきなるじやへ筆のてまくのはづるしをこよいはあふて心ねのなるかならぬかのふコレ是のふなるかならぬかなるは灘のみづ日は照共たく

すとふたりゆねにとふたり君のちとせをへん事は天津乙女の羽衣よなるは灘の水「おより千年のひなつるい万せい樂どうたふたり又万代の池の汀に龜遊ふ甲よ三玉りなへたり灘のみづれいくとおちてよるの月あざやかにうかんたりなたさのいさごさくとしてあしたの日の色をかるほす天下泰平國土安ねん長久と君を祝ひてちはやふる丁さしぬはふ万才樂「れさへく悦ひ有や悦の玉づさもらふて初てしよらに入につり「十二の子寶座敷につ、りと並へてくね直り有かしたとをけさよたつまつる松だんだらいさこに取つく引付乙女の袂かへすくもおもしるやいやでもれふでもせひに一さしは舞いへあ、らゆうがほしやさあらは鈴をまいらせふ「其たねまさのたね蒔てなるはるさるの鈴の音をつさせぬみよの壽を

うたふてやがてくあふきををれさめける

○老まの

本てふし

けにおさまれる四方の國々せきの戸さ、でかよん「是はお
い木の神松の千代に八千代にさ、れいしのいはほとなつてこ
おのむすまで、松乃葉いろもどきめきて十かへりふかきみど
り乃内ねむれる夢のはやさめていろかにふけしはなもすぎ月
にらうふき身はつねがる、いと竹のるんにひかれてうつら
くと長生のいづみをくめるふ、ちせり「先しやだんのかたを
みてあれが北にが、たる青山にいろどるまものたなびきて風
ふひらりひらめきわたるこなたにはすいてうこうけいのように
ほひむうしをぬすれすみぎに古寺のさうせきあり、しんしよ
うきぼんのたゆるとなきあがめさへあかます、りのふですさ

みて、につうさをしよしけりニより「まつといふ文字はかはれ
どまづことのはのうのうい有てつむとくに、ことぶきいはふ
とさえきのしらべうつづく高砂の名なるほどりに住よしのま
つのれい木もわろきをうたるをづうしさた、かわらじどふ
かみどりうれしき代にねひくのいくせのおもひかきりし
られずよろこびもことわりぞかしいつまでも「きをさいさめ
の神かぐらぶがくをうなふる此いへにてあもみちたつ有がた
や三下り「松の太夫のうちかけつたのもやうにふじいろのい
としかはいもみんなく男はいろりじやもの、すねて見せ
てもりのま、よりへある夜ひらうにつき合のくものまがきの
かけこどはエ、にくらしいこがくれにはれてあふ日をさづく
るこの君のゆくをへ守るとしが神たくのつげをしらす松の

風ふつたじさいのはんあひも久しき宿こそめでたけれ

●端哥之部

○色けないとて

いろけあいとてくにせまいもの。しづがふせやに月もさす見
やれ茨にも花がさくたうへもどりにそでつまひかれ。ことい
あふどのめづかいにまねくあいつの小室節。をいきにのこる
露のたまうくとよんだがむりかいな

○かきをくる

かきおくるふみもしどなきかながきの だいて寐よどのをま
こへて。岩にせかれてちるなみの雪かみぞれかみぞれかゆき
かどけて浪路の ふたつもじつまをこひしとしたりふてくます
へ

○えさのくもり

はなのくもりう。とは山のゆきか花かわしらくもの中にうよ
くふく春風のうき寐さうふやさい涙のこ、はうもめも都
とりあふきひやうしのさんざめくうちやあかしさうちをゆ
うき

○すいなうきよ

すいな淫世をこひゆへにやばにくらすも心から梅が香るゆ
る春風に二枚びやうぶを。ねーへたでおぼろつさよのうそあ
うりしのびくいてあいぼれのくせつのとこのなみだあめ油
の蛙も夜もそがらしんに啼でハエ、あいかいあ

○秋のそわ

あきの夜のあが物とはまん丸な月見ぬ人のこ、るかおふけ
てまでともてぬ人の。をとするも乃はかねばかりかぞへるゆ

びれねつをきつあしやてらされてるわいな

○おたかひに

おたかひに。しれぬが花よ世けんの人に。しれりやたがいの身
のつまりあくまであまへに情たて、ほれたがむりかへーとん
がへな。ほれたがむりかへ

○かゝの千代

あまにくれてうづらうと。あめみぐさあめにむきぶのかみき
んへたのむの。かりのトふでにうらつしかまいにぬれつばめ
ひとくのとこのちはことばに。わかれをつぐるひもすとら
エ、にくらういたまくらに。のちのあふせをほりばてふしゆ
びと心をのこすらん

◎夕だち

夕ゆふだちやあつつとふりくる船ふねや此こゝ戸とにびか／＼はあさん
さんはこはけれどまたしのためにはいづもよりむすんだえん
のかやのうちにまやはれゆくなつなつのうら

○西行

西行さいぎやうはうしさん初はつて東あづまへ下くだる時ときすみの衣ころもに竹たけのつゑとをなす
そどのたゝきき金かねチヤンチキ○チキ／＼なむあみた

○一夜あくれば

一夜いちやあくれば。またまもはる花はなのさかりの梅屋敷うめやしきはつね一
聲こゑうぐいすのホヲはあけうらやくろくは實じつふうれしやないか
いな合

○くせはいて

をせつしておもわせぶりのうらね寐いり入り。おくろさしきのつめ引

がついなうだちでうれきりにみたる、かみのうしろぐし。はち
はんかねのきぬ／＼にわかれともきいわけがらす

○むつとして

むつとして合かへれば門かどに青あおやまのくもりしむねを春はるかせの
またはれてゆく月つきのかげならばおぼるにしてほし

○うろとまこと

うろとまこのぬたせがわ。だまさる、氣きでだまされてそへは
のどあれやまとなれ。わしが心こゝろはまみゆへあらば。みはまたが
わの船ふねのうち心こゝろのうちおんさつ

○羽れりうまして

羽はれりかまして。袖そでひさとめてどうでもけふはゆかんすうと
いひつ、立たてれんじまど。しようじろめにはひきあけてあれ

みやじんせ此雪に

○あゝたよわ

あゝた夜はついでをくれなわけのうねたまろごけんしやにな
しんきらう

○萩桔梗

萩桔梗なかに玉づさ忍ばせて。月りのすへに草のゆめ。ぬしを
まつ虫よごとにすだく。更ゆくうちにかりのこへ戀のこらし
たものかいな

○どて

土手を通るのもしやあいつじやあるまいり。やちどうた
じふ蛇の目あいやあいがさを一つぼりとあれむらさめがふる
わいなさりとばさみじかな一寸あゝてもかいらんせ

○しのぶ夜

しのぶ夜あちらむかんせお月さんいろの世界じやになーん
まらし

○ぐち

本てふし

ぐちじやなけねどユレマきうさんせたまにおふよのたのーみ
をあふてうれしさまかれのほらさエ、何のからすがエ、いじ
むるめたまへのろでどわしかろであわしてうたのよッのろ
でろじのほろみちてまけたのむねおどろうすあけのうね

○我もの

本てふし

わが物と思へばかるし笠の雪戀のおもにをかたにかけいも
がり行ばふゆのよの川うせさむく千鳥なくまつみにつらさ
置ごたつ實にやるせはないわいな

○三國一

三下り

八十八

さんごく一の合さ、ふじさん合たまはさのをい八千代はでも
どちぎりーに「西こく順禮さアさごへ以か合ち、は、のめぐみ
もふかさ粉川寺」さりとはつらひさアささながら合たらちねの
うらみもふかさふくれづら

○今朝の雨

本てふし

けさのナアあめにしつぼりと合亦いついけにながひ日をみぢ
かふくらせとこのうち合かみをひさささまゆげをうくし合をふ
しこちの人へ私がかへないなんとしよ合われねあんすかをさ
なんせ合わけばのなまで合くれの鐘

○あさくさ

秋艸の。はなのひをどく。よわのかね。かたむく月の。つゆしど

れ。ぬれたふりせず。うむけてゐても。いつかをばあがほにい
で、人にはなせぬ中じやぞへ合

○薄墨

本てふし

うすいみに。かま玉づさのねもいして。かりなきとあるをひや
みの。合月かけなまでぬしさんにこがれてぐちなた、みさん。
あもひまわせてま、なまんはやくまがいをうるかしく

○みとひとつ

本てふし

みわひとつ。こ、ろはふたつ。みつまたの。ながれによとむ。う
たかたの。きみにあふよの。かじまくら。あかつきがたの。くも
のあび。なくや。なかづのほど、さす

○かねてより

本てふし

かねてより。くどあじよひとしりながあ。この手がしめたどう

九十八

ヒースの。うつかとしてにくらし。かりてたばかりつげのく
し。きほとつじうちひくばかり。ほんにやるせわないわいな

○しがのかささき 本てふし

しがのからさきのひとつまつ。よごとく。に。ままりがらす
がもれくるも。あをそくと。うれしむなみだのかわくまも。
しめりがちなるよるのあめ

○卿もねーづむ 本てふし

卿もねしづむよせがらに。まくらひとつでねもやらす。をさ
もなをらでまたかたおもぬ。あむぬひとならしちですむ。心
ばかりわはみなをの

○一こゑ 本てふし

ひとこゑ。月がないたかほと。ぎす。いつーかしらむみぢか

よに。はだねもやらぬたままらに。ねとこご。ろはむごらし
い。おんな心はうふじやない。かたときあわねばくよくと。
ぐちあおもひをなっているわいな

○花むらさき 本てふし

はなむらさきの色くらべ。めれなき人をまつち山。春のかすみ
にたなびかりなつらうつせみなさまらし。秋のしぐれに袖ぬ
れてはかなきるんのやるせなき。小たまにめぐるかりのこへ
つら、のどこのひとりねにもはせぶりにしのはる、東男の
ア、しんき

○若の浦 本てふし

わかのうちにはめいしよがごさる一にどんげん二にたまつ
しま三にさがりまつ四にしをがはをあまのはしだてされどの

もんじゆもんじゆさんはとけねどもされるといふながさに
かゝるサ、なんどしよどいよどいナ

○仇な世かい 本てふし

あだな世かいに仇くらべうかれてあろぶあすか山かねは上
野か淺くさかかすみとくもにつ、まれてかさいちらすな花
のまさかり

○新玉川 本てふし

たまがはの水にさらせしめさのはだつもるくせつそのの其うち
とけし、またのもはれがみ思ひださずはすれずにまたく
るはるをまつぞへ

○木津川 二上り

れりから月のいでしほやながる、かたは木津川へこげくれ

ないにろめてみしもみじてきようへにしきせんちりゆくは
づへばらくとふるはなみだかあきさめかかとはならぬ川
づゝみ

○あだなゑがや 本てふし

あだなゑがをについはれこんでつまてふきじのはろろり
もちひろのうみのかりがねにことづてかへすつばめのたよ
り合うそなら回んにかをとりみればはがへのはだにいだきし
めそのまゝろこへとまりやまうれい中じやエ、あいかい
奇

○雪はともへ

雪はともへにふりしげる。屏風を懸の中立あてふと千鳥の三
ッぶとん元木にかへるねぐらとり。また口青いじやないかい

○思ひこんだる 本てふし
おもひこんだるわがこひは合さきいじやけんできれこんじよ
たどへのいともされえせぬ思ひにおもふた人じやものまたわ
たしやみれんがあるわいな

○雨をしきりに

あめはしきりにふりまざる。とをりかよりしてむめ道。いきな
すまゐのまをり戸をよべとたうけどをとせす。またをめが
さめぬじやないかいなア

○まのぶこいじ

まのぶこいじいさてはかなさよ合こんどあふのがいのちがけ
なみだによごすおしろいの合りのかはかくすむりなさけ

○夕ぐれ

夕ぐれに合形がめみあかねすみだか合月つにふせいのまつちや
まほあけた舟がみゆるぞへわれ鳥とりかなくどりの名なに都みやこにめい
まよがあるわいな合

○柳橋

柳橋やなぎはしから小舟こぶねでいろがせさんやぼり合土手ての夜よかせにぞうと
みにまむるもん坂さかぬしをまつみはあわぬろの夜よのかんまや
くの方かたく今日けふはござんすとをちたかんざしたうみざん合

○四季

五十九
○春はるの日ひながに手枕てまくらやまつぼりぬるこのさの雨あめぬれて色いろます
山櫻花やまざくらがとりもゆるんカイナ
○夏なつの遊あそびは兩國りよこの出でふね入いふね家形舟やうたね上のぼる柳生やなぎは下くだり玉たま

やがどりもつゑんカイナ

○秋の夜なかにまつぼりとすいたどうしのさかしむかいふけてさしてむ硝子まど月がとりもつゑんカイナ

○冬のさむさにをさごたつふどんがゑんのかけ橋のつゑる咄しがねてとける雪がとりもつゑんカイナ

○四季 三下り

○春のとりさくちのもとにかけまようぎうす茶こひちやのてまへして。あたりまはゆき花ふらさ

○夏のは小舟でぬしとさしむから。すだれをあけてさゝめとど。いさなせかひじやないかいな

○まぐれしてはつみはつらきつたもみじ。をどのふものはのまのあめ。まめりがちなるとこのうち

○冬の上夜はこたつでぬいとさしむから。さへつをさへつて手さけ。ほもるはなゝわどてへやち

○宇治

うちは。へ茶どころさまへに合なかにうわさの大さち山と。ひとの氣にあふ水にあふいろもかもあるぬれたどしすいな浮世をやばらしい。コナヤ〜〜こい茶の中じやもの

○富士 宇治うへ歌

ふじのエ、すりのにたつかりの合なかにうわさのうがさやうだわわ。ひごろのかたきとつけねるふ。どちがとりもつあめなみだれのれすけつねひとねもいやれまてやれまてまてとめたわごしよのころふまる

○ゆきあま〜

ゆきはまんとくよもそのとをり。どうしてまらとまんなかで。
ひとりころりとひじまくらなんどきじやア、ア、ぬぬられぬ

○なせにろのそに

なせにろのよにはらたてさんす。まよにわわれぬみでわぬし。
きげんなをしてぬやまやんせ。なかなをりエ、エ、明の鐘

○まんとふけては

まんとふけては出しの音を。枕にかよふ夜嵐の。身に一みど
どうた、ぬの。おめにをどろくむぬのうち。さめてかどうりや
六ツのかね。

うきよのぎりせひをなや。ひと、せぶりにまためぐりま。
よしののあらしにいらをどろかす。なくむし。へをねをどめ
て。やみにもかたふ抽のつゆ。らと。おもぬやまざるらん

○うきなたてしと

うきなたてしと口さまで。まざとはな一て逢とせ。むねでの
ろけてまらん顔。うわさするさへぬらんとはほんにうるさぬ
人のくち

○水ではな

水ではなとふたりがなかり。せかれあわれぬ身のいんぐ
わ。たどへどなたのぬけんでも。おもぬさるさ。おもぬさる
さ。エ、ないわいな。

○夕立

三下り

夕だちや田をみめぐりのかみなれば。かさへたろうの。あらひ
どぬ。さ、がこうじてまつねけん。ほんにまんなことじやエ
ほかの小舟にライイ竹やの人。マテ竹やの人とをぶこどう

清元之部

百

○梅のはる

本てうし

はるげしきういてかをめのひいふうみゆういつかあづまへ
 つくばねのかのもこのもの都どりいざこと、わんゑ方さへよ
 るづ吉わら三やほりたからふ絲てぐ合はつがいによいはつ夢
 をみほぶとん辨天さんどろいぶしの花のにしきの飾りやくは
 たち計りをつみかさね蓬萊山ほうらいといをふなる富士をせなぎりに
 やがためこの汐しほ煮り長くいすわれればほんに田舎いんせのましばたくは
 しば今戸のあさけむりつ、くかまどを賑にぎふて千秋樂せんしゅうがくにいたみ
 をなで万歳らくに命をのぶまゆびの松がへ竹丁のわたしも
 るみは時をゑてめでたくて、にすみたがわつさせぬ流れ清元
 と榮さかへ壽さむく梅が風いく世のはるや匂におふらんいく世の春やには

ふらん

○北州千歳

凡千歳のまんざいらくとふたり又はんだゐのわけの龜の甲は
 さんさよくにまがりてくるはをあらをさすあら玉のかすみの
 ころもゑもん坂さかゑもんつくろふ初がゐのたもと豊に大門の花
 の江戸町京町や脊せ中ちゆう合せのまつまつ銚松しゅうまつのくらゐを見返りの柳さ
 くらくらの仲の町まちゐつしかはなもちりてつんどみせずがかさの風
 響ひびすだれ掛けてはと、ぎすなくやさつきのあやめぐさあやめ
 も分ぬひとへものひよしごげんのふみづきもなき玉づさとふ
 るふにはしのちわごときんがときけばしろしろとしろがたび
 百 ちのそてにそよはや八さくのゑろむくのゆさしろ妙にふりな
 ちみ重ねて二どの月見につめうち掛のさく重さくのまたせる

離子さゝゐるか引込つきたしのやくりく堅き神無月に高まて
 どよりふうりうの山どりのをのとり市ぬもがりゆけばち鳥
 わしにほんづつみをどて馬の千里も一里がよひくるあさへさ
 市のもどりにほしはら女郎しゆがてまりつくちよと百つぬ
 た千そうじつのはの山のこのも彼のも葉山しげ山をいげりの
 まげみ影よさかへゆく四季ありくのふうけるはげにせんぎ
 やうも斯くやらんすみだのながれ清元の壽延の太夫どの君は
 千代ませませよろこぶをぬわうてんひつ和こうじん日びに太
 平の安しをすむむるわいはらのくにやすくとまぬをさむ

○山姥

桃は氣まゝに山吹も見果てぬ内に春過ぎてはや卯の花と花が
 つみそしてあやめせうぶやかきつばたはつろりと時鳥アレタ

立にぬれまのふ涼風がへ雁がどいけし玉づさは小萩の袂菊萱
 に返事しれんも朝顔のおくれ咲なるうらみはひ露にもぬれて
 まつばりと伏猪のどこの菊かさねヨイ／＼ヨイヤサ 武術を
 はげみ奉公せと必々人さまに山姥が子と笑れな今別るゝとも
 此母がうなたの陰身につき添て猶行末を守るべしとは言物の
 これがマア名殘おしやいとをしやといだき付きおもわすわつ
 と一聲は梢にひいさあわれなり

○落人

色で合いのきのふけふかたい屋敷の御奉公あのおく様乃おつ
 かいに二人が鹽谷のごけらぬでろのあくゐんかはくゑんにと
 うにたかほのよしきゑのこんなゑにしがからかみのれしのつ
 がいのたのしみにとまりくのはたごやではんの旅ねのかり

まくらうれしい中じやないかゝなるらさだめなき花ぐもりく
らさこのみのくりことは戀に心をうばわれてれいへのだいじ
ときいたときおもきこのみのつみどがとかこちなみだにめも
うるむうれうのときうるたへものにはたれがしたみんなわ
たしが心からまぬるうのみをながらへておもひなをしてれや
さどへつれてふうふがみをしのびやほなゐなかのくらしには
はたもありひらんしごとつねのおんなといわれてもとりみだ
したるーんじつがやがてとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ある也へにいまのたまへがうきなんぎかんにしてとばかりに
て人めなければぬだきつきことばにいろやふくむらん

○貸浴衣汗雷かしのあせにふるあらい

夕立此雨も一トふり馬の脊を分て涼しき川岸に柳のねだの

よりろひていつしかいろになる神の音さへ遠き筑波東風の
こるあつさを川水へながすうわ手の歸りふね草の葉にや
どりし月も小夜風にくやこぼれてはらくと露かまづく
かまづくかほめかぬれていろます野邊のいろ「意氣なれか
たにけり合いぬやほなやの字のやしきもの十のとしから
小姓を何とめとふておそは役はたちはこそせといろ戀はれ
きてきびし白玉の露にもぬれ事はおく「あどほいらへを
ながづどのあぶらかをりてなまめかしはれた男に手をどら
れどび立ほどのうれさはかやよりむねになみ打て紅麻
うつる顔の色「またひとまきりふる雨に中をむすぶの雷や
こわさにいださあふ川のふかきちぎりぞかはしける

○假名手本忠臣藏かかしんぐら 四段目力彌

誰か謂水にも心有明の櫻うつして渦巻はかけ唇をはたらかそ
 といにへ人のからうたに殿の心をなごさめんどかまくら山
 の八重九重「いろく」櫻花かごへいける人こそ花もみぢ「佐野
 のわたりにあらねどもまつ冬木をりささろむる梅をさりやは
 何べき」山里の櫻を見れば春毎に心ほくして育ててを「仇に切
 取りかなしさよ」松はもとより庭木にてながめとなるは梅
 櫻「よし夫とても君もへ何かれしまんもろ枝を折から一天か
 きくもり俄に草木鳴動なし鉄炮雨の震動雷電たがみな月とも
 ふ立のはれ間をこ、にたいすみぬ

○八段目旅奴

ふるはみぞれか初まぐれけさの出がけにぼらばなで手當りま
 かせ酒きげん「五十三次また爰で何で招津にもかりやうもの

ねるやこそはらもよし原と口合まじり来りける「どつてい
 「どまつた」水たまり「ナ、なんだあるけバあるくとまれバ留
 るおれがまねをまやアがる「むかふいたしか左りき、あるけ
 ばあるく留ればとまるコリヤどうじや「ハ、ハ、ハ、ハ」かつた「影
 ぼうし」旅は道づれ世はふさげとんだ月夜と小室ふし「登り下
 りのおつら馬よさても見ごとな手縄染かいナアエまごまの
 のくせかたかごるでまをたよりにてむろぶし吉田とふれば
 二かいならナまかもかのこのふりそでい「ふつてふりくる御
 國いり「殿のかへりをまごから見たればだいがさ立がさひさ
 馬あかちにわかどうざうりどりやりもちコノかつばかごア
 レハサノサ「コレハサノエイエイ」うさたつそらさ
 りあいのかんばらさして「Sそまもへ

四季三番草

八百

どうくたらしたりたりたらしあかりらりどう「所千代ま
でかわらぬ色の緑立春松の花曾我菊の名も翁州おきなりよやいづく
の花の漣なみまい〜と落おちて水の月すたふの袖も千歳の梅が香ま
たふ鶯もはつねめかしき我宿の竹も直くなる一節にうつして
四季の三葉艸「立まふ姿いとほへて」桃はまよ〜んに柳はませ
た風にもゆれも解けかゝるこちは海どふ蕾の儲たねぶうら山吹に
まが楓ふじ色衣主とてもかざす袂の櫻がり「其盃の數よりも
「あふさへ〜く悦よろこわりや〜く幸心にまかせたり」千早振神のむ
かしにあらな國卯の花垣根かきまら浪の渚のいさごさく〜とし
てあしたの花の富貴艸「女心は芍薬の思ふた計はかり癒百合のまだ
葉櫻のうめぬにうれやあんまりな梨の花氣も石竹に軒のつは

菖蒲もまらで拆添へていつか手生の床の花「元の坐敷へおむ
〜とれ直り候へよふがましやさあらば一枝まいらせふそな
たころ「君がゆかりの色見艸うつろふ水に牡若池のみぎわに
鶴龜の縁にし嬉〜されどり花「おみなへ雲の約束に小萩が傍
で尾花招けべいとす〜と通ふ心の百夜艸こちや〜く眞實いと
〜らまろふじやいな「時雨の紅葉寒菊や水仙清き枇杷の花
乃ふいさのさら〜と茶山花や恵みに花のいさをしは千
代に八千代の玉椿詠め盡せぬ花の時今も榮へて清元の取る家
とを祝しける

梅柳中宵月

九百

あぼる夜に星のかげさへニツ三ツ四ツか五ツか鐘の音ももし
やわが身の追手かどむねに時うつ思ひにて廓くわらをぬけし十六夜が

落て行衛も白魚のふねのかいりに綱よりも人目いとふてあど
 ささに心れく霜川はたを風にたはれて来りける「うれしや今
 の人聲は追手でのなかつたうな。廓をぬけてやうく」と愛
 まで来たとは来れども行ささきぬ夜の道。どこをわてどに。
 ぬかうぞいの「まはした、すむ上手より梅見がへりのふねの
 唄」まのふならどやみの夜はれかしやんせあま月に雲化ささり
 なくあま待宵十六夜のあまの首尾のあま、よいとどのく
 「聞辻占きこつぢうぢいろいろ」と雲足はやき雨ぞらもれもひがけなく吹
 はれて見かはす月の顔とかは「や十六夜ではないか。清心様か
 わいたかたわいなア」すがる袂たもともほころびていろかてぼる
 、梅の花さすがこなたもにくからで「見ればろなたは只ひと
 り。くるわをぬけて。どこへもくのじや」とこへ。行どいつうよ

くな。けふ御追放つゆほうと聞たもへ。ひよつとこれぎりあはれまいか
 ど。思へば人の云事も。心にかゝるつぢうらに人目をまのんで。
 来たるとし。いづれへなりと。ともどに。つれてのいてくだ
 さんせ「そのこゝろざしはかたじけないが。ふとした心のまよ
 ひとり。御おんをうけし師の坊の。お名をけがせしもつたいな
 さ」ただ何事もこれ迄は夢と思ひてせいせんは今ふん心にな
 ちかへり「京へのぼつてまも行な一出家とくだつす心。そな
 たいくるまへ立ちへり。よい客あらば身をまうせ。親へ孝行つ
 くまやいのふ」そりやなさない清心さま「今更いまさらいふもぐちな
 がら悟る御身にまよひは蓮はての浮氣うきはや一すばれあまういた心じ
 や。ごんせぬ「彌陀をちかひにあの世はでかけてうれしき袈
 裟衣さころもむすび一縁えんの珠數じゆずの緒を。「たま〜あふに切れよと

い佛すがたにありながら「おまへは鬼か清心をきこへぬいの
 のととりすがり恨みなげくぞ誠なる」まこと「うういやるはうれしい
 が。見るかげもない。所化あがり。まじに心中立すとも思ひさる
 のがそなたのため」うんなら。どうでもわたしをば。つれての
 いては下さんせぬか「サア。さるの事はいはぬほどに。早うくる
 わへ歸りやいの」うのお詞が。めいどのみやげ「岸よりのぞく
 青柳の枝もまたれて。川の面水に入なんふせいなり」南無あみ
 だ佛「すでにかうと見へければ清心あはていたさとめ」ア、こ
 れまつた。はやまるな「イエ。くはなしてころして下さんせ
 所詮しよせんながらへ居られぬわけ也へ「ナニながらへてぬられぬと
 は」つとめする身にはづかしいわたしやれまへの「エ、うんな
 ら。もーやぐううがたねを」アイなア「ふッア、このま、わか

れてゆくときは腹の子はら迄まで闇からやみど。なつて一所にともな
 は「くるわを扱しうなた也へとらへられなばかどわかし」ふ
 た、びなわめにあはんとり。いつり此場でとも「に」うんな
 ら死んで下さんすか「外にまわんは。ないわいの」はんに思へ
 ば十六夜は名とりも年は三ツましてうと十九の厄年にまが
 身も同じ廿五の此あかつさがわかれとは花を見すて、歸る雁
 ろれはと二世の北の國これは淨土の西の國頼はみだの御誓
 「南まいたく。なむあみだ」これが此世の別れかとたがひにい
 だた月影もまたもやくもるあまもや雨催ひ「此世でろはれぬ二人りが
 悪縁」まのうと覺悟。まはめしうへはすこしもはやう「南無あ
 みだ佛」西へむかひて合す手も合あてはる余さむの川泥へさんぶ
 といるや水鳥のうさねをあとにのこけり

○能色相圖

志んの始皇しくめうの阿房宮あへいみやうのせんせいにあらねともすいなこゝろ
 も三浦屋みづらやのちやはかづさや雨すけときてんも菊のほかささ
 へさんやふうりうあらまゝを松のくらしいのきな定「きまが由
 縁と思へいとしや扇をかほにはな平太ちとつとかうしへとぶ
 ことり人め思はでかとひぢのおもひくらへんてむの山みやまふじ
 とつくばを中くにとふにたくこゝろもなりもまさりたど
 らぬはなもみぢ中に柳のどちらへなびくかせきたいとはうい
 きらし丸にいの字をいのちどかけてかさねあふぎに三升とは
 もやうもおなじますらをのいろのてくだもやさしけれ「はん
 にわたしをかどのとりくがいの内は初くわいからうろもくせ
 つもいふたとてうれ見やまやんせ世の中はまがきに菊のみ

だれささうれしがらせてにくましい千に一ツもまとならもつ
 たいないではないかいな見かへりやなぎあいのてに「月をた
 そりにとるの鴈かりふたつみつをつならんでかともふ道みちをてらし
 て忍ぶとはあんまりすいなやまのはにせできてぬる、か
 志もんがいなしどもねや「うねめのきぬにあらねども二人り
 はやらじとまたひやくむと、せをけふぞまつりにあたりど
 しけいごてこまへはなやかにかざるさじさのもうせんもいる
 にでにけり酒さげん神田ばやしもさをいとく「さても見とか
 しはなの江戸えどまつりについのはでもやうぼたんかんぎく
 うらぎくのもかりもてうど花づく「まつりのなアはでな
 若イ志めがいさみにいさみ身なりをうろへてやれはやせられ
 はやせ花だしてこまへけいごにぎやうれつとんやさ男だてヒ

やのやれこれさたてひきじやのといふちやどしたに^あてまら
 せる色のとくならてゆちでも常からぬしのあだな氣を^あまつ
 てのながら女房に成てみたいのとくがで、^あ神や佛をたの味
 ずみ義理もへちまのかえばかり^あ親ふんさんのお世話にて^あわ
 たりもほけてこれからはせけんかまはず人さんのまへは^あか
 ます引とせて樂しむうちふ又ほかへ^ありれうらやみと口くせ
 に「森の小からすわれをばたはをからそのはねさへもなぞ
 とあいつりゑても^あの此て、かきやりの家のうぶ「やんれひけ
 く」とい聲かけてゑんやらさやつと抱^あ床の中から小とぎふ
 とんを^あなぐりかけなんてもつちを向^あまやんせといくくと
 んや^あ十といなかとしのこいさかいならちわとくせついなん
 でもかんでももんやもせい^あまの、めの明のか糸ごんとなる

ので中なをりすんまいたといくくとんやな^あそふとがびうけ
 中綱「^あゑんやくこれはあれたさ此へエンヤヲヨウ」げにもう
 へなきま、王の万歳千まうかぎりなくはたんは家のものにし
 てれ江戸のめとみぞありがたきく

○彌生の花の淺草祭

彌生なかその花のくも^あ鐘は上野う淺くさの利生のふうき宮
 戸川ちうひの綱のいにしへや三社祭の氏子中もれぬちかひや
 綱の目にけふの得物もまんとのおかけお禮に。朝参り淺草
 さ寺の觀世音綱のひかりは夕あーや^あ晝あみ夜綱に。なきもと
 く乗てむ^あ河岸の相場にまけ^あは生貝生鯛生いわーなほぐさば
 んだばさらんだわびた世界じやないかいな^ありなた思へは七
 里がなたをのぬ命ちや捨貝きた物なうへもどろふと捨がい

来た物命ちやきてかい来た物なしかへもど返ふとサアサ何
 とまとかどまとかいな「はいてくりやるな八まん鐘とかいの
 お人の人の目をさませね人の人のかいい〜お人の人の目を
 さますサアサ何とまとかどまとかいな「歸りままを待まやん
 せにくやからすがなまわいな」うゝる折からこまうか風なま
 くさく身にまむるあきれてまばし兩人は天空さつと見あぐれ
 は「善か悪かの二ツの玉」あらわれ出たの「こいつのけらたな
 「ア、ラふしぎやな合ひとつ星なら長者にも。ならんで出たる
 二ない星あられ出たる二つ玉思ひがけなく落ちる風のぞつ
 と身にまみうるあへふしもへてはするころ」悪にとりては
 ともれろかや悪七べつたら悪禪師保元平治に悪源太かぢら
 源太の梅かへを。壁の地ごくへ落した、めしも有とかや。是は

昔の物がたり「それかいやさしに氣のどまににおいらが宗旨は
 有がたい弘法大師のいろはにははへとかいの心いからくりまど
 北山まぐれじやないけれど」ふられて歸るはんもあり夫でれ
 宿のまゆひもとく合とかく浮世は儘にはぬらぬ善に何とまは
 コレ善此綱牛に引れて善悪の浮れ柏子の一睡早い手玉や品玉
 の品とく結ふ玉釋かけて思ひの玉くしる明てくやしき玉手
 箱かとも玉はこ玉松風のもとはさ、んさでうたへやく〜淫
 れがらすのうは玉やうやれ〜く〜ろふたぞ〜こへ〜に
 「まともなや」うたふも舞も法のまどくに善玉は消て跡なく失
 ふけり

○祇園町一力の段

さすぞへさすはさつ、さ初くりらのまやくと手にはとれども

まもまんがは

十二百

「こちらがさすのの小どりさしのかぬ中へひとり持さるのもちこいてきめたぞきめたヲットどつてひ爰らがひみつのこんたんか「さいてくりとく」これ物にかんまへて「まつこれ物にかんまへてちをほとさいてくれうかさいたら子どもにはねやめかひわや小がらやまちうかあるりは見ごと形にしきどり」こいつはめうくきめうてうるい何でもござれねふつはうばできんもつと目あてちがわぬ稻むらをねらいの的どためつすかめつ出や手なみを一トさしといつさんばうりに向ふを見てきとる付はなてあちちとどりざうさはもろの儘に手あしのはしてとらんとすれば鳥はどてへかすいとく寺思あんどはうに立どまりレタリ所てんではなまれ共突出されてもじぶんもの

これじやゆかぬとすてはちにあとほどふなれ引三味せんのか「氣も二上りか三下り」浮いてきたく來たさのさけのゑいこゝろ四せう五せうの夕すいみ。げいたひこを引つれてかみかまもへいまたびもゆたかな客のあさかへりカアくく「うらすなきさへエ、味いやつめとなふりねかめうらうこの目まろか見つけたらさそせきれいで有ふのに「日がらひばりの約束はいつもとしきり顔鳥見たさ「ふみにもくとふとまどりのろ乃かへを書かへり事なるとまときて仕かけたらまつた色ではないかいな」うのとさあいつう口くせにど、いづもん句もふるめいた一ばんにまろべといふたゆへてんの手ぬくい顔かくしいつもあいつのせきばらいハツクサ。摩されたをひやうばんにさいさいありや有がたさ「實に御ひめきの

一十二百

とまを得てさじさのさやうもおもーろさうさせまがくやへは
しり行く

○喜撰法師

我いはは芝居のたつみ常盤町まかも浮世を放れ里「世事で丸
めてうわきでこねて小町櫻の眺にあかぬきやつにうのかり眉
毛をよまれ「ほうーくはさつ、さのすけんろめきでかるら
れよかわーハ瓢箪浮身じやけれど」主は鯨のとり所ぬらりく
らりとけふも亦うかれく〜て來りける「もーやと籬をような
がら喜撰の花香茶のさうじ「波立胸なみだをおしなで、ままりなけ
れどはち巻も幾度まめてもみぬれざるなぬれて見たさと手を
取て小の、夕立ゑにーの時暮「化粧のほどの手をくんでどう
見直してどふふるひ「けふのごげんの初昔悪性と聞て此胸が

ねばろの月や松のかげ「わたしやおまへの政所いつか果報も
一森と合はめられたさの身の願ひ「はれ過る程ぐちな氣に「心
の底のまれかねてぞれつたいで「ないかいな」なせ惚さーた
コレ姉へうぬほれ過きたわるじやれなわつちもろんなまされ
いはだ五十五貫でやまふなら廻りなんしへうら〜鉄棒にる
じやままりやす長屋の姉へが鉄砲絞りの半巻りか花見のさせ
るじや有めへしすてきに首にからんだいらうとんびが袖揚
さらひれとなりのれいらんへまらねへかほもすましいあなた
が高い観音様の鳩は五重や三重のどうの九りんへ留りやす
「す〜となれてきいたどし「ヤレいろの世界に出家をとげる
ヤレ〜〜こまかにちよぼくれ「愚僧が住家は京のたつみ
を宇治山とや人云ふなりあちや〜くちやさゑんの咄すこい

茶のゑんの橋姫あし夕べの口舌の袖のうつりが花橋の小島が崎
より一さんばしりに走て戻れば舟内のか、あがりんきのつのも
もじ牛も涎よだれを流る、川瀬の舟内へもどりて我からこがる、
ほたる螢をうつめて手くだの學問「からも大和も里の戀路か山吹流
しの水に照そふ朝日のねやまに誰でも彼でも二世の契りは平
等院とや云とは是のうるさいこんだにホウ「奇妙てうらいど
う如來「て、に極るたのーさよ」なに江のかたはの蘆の結ば
れか、り「ヨヤサ」コレハイサ」とけてはぐれて逢ふ事も松に
かいありヤンレ夏の雨「ヤアトコセ」ヨイヤサ「アリヤ〜」こ
れわいな「此なんでもせへ」住吉の岸邊の茶やよこー打掛けて
「ヨイヤサ」コレハイサ「松でつろやれ蛤を逢ふてうれしきヤ
ンレ夏の風「ヤアトコセ」ヨイヤサ「アリヤ〜」「是れはいな

「此なんでもせへ」あね様あて所かへ島田金谷は川の合はたご
いひたてれ定まり「れ泊ならばとまらんせれふるもどんく
わいてゐる障子も此頃張替てた、みを此頃かへてあるおねま
のお伽もまけにして「わらじの紐に仇とげて結んだ縁の一夜
妻あんまりにくふはあるまいか「テモろうだろ〜」ろうであ
る「住吉様の岸のひめまつ目出度さよ」來世の生を黒ぼたんれ
のがいはりへ歸り行くことがさどさ〜て急ぎ行く〜

○由縁よゆ縁の曆歌

たさん茂兵衛が中々は合じつとまこととを立どふすはしらごよ
みもかみやれて「やふれかぶきとなるかねもたしか上野か淺
からぬあたらちぎりも今は切ぶみにあははや氣もせきのわざ物を心の
ねたば其人のあはめくへたづねてあいばれと「たさんもねなじぬ

れはとりまねくちを出てしまんほりと世を秋雨のからかさも
 八目志のんであやぶ日夫も何ゆへのささりをふまじやのな
 んの^かのへさるまねけふはあしあ^のさのへ手をまらでかはせ
 し事はじめ^か「うの姫はじめひさかへて今は命もほろぶ日日^か
 も長かれとねがふたる^か八十八やおよびなき年は十九と廿五を
 名ごりのまもど見あぐれば^かうらははくる日のくらき夜にたが
 ひの心すれちがふくものあし^さへ行あふて^か戀ぢのやみにま
 よふ身のばれてうれしき月の顔^か「アれさんか」茂兵衛さんか
 「エ、あのれはなア〜角太郎がほうへうせるとわやかたか
 ちの^ア切多今さらそふしてきまふと思ふか」サアすまぬと
 いふてわたまやま^んじ角太郎さんよ「いよくはれてうせ
 る氣か」ア^いまれた事いな「心がはりをさくよりも茂兵衛はせ

きに關の孫六ぬく手も見せず^かおもひまれよといふまもまら
 は^かこなたはかくごの心とゞいてれち、る書をさ目も月あか
 り取あぐるをやらじと留るをんな氣もかとはさうでのつたか
 づらつきぬるにしかとみれくり「スリヤ此かさ置にあるをみ
 れは此茂兵衛がなんぎとなつたるはんたらを取かへさんため
 心にをない^ア切ぶみあいうづかしをいつたのも此茂兵衛が
 手にか、り「死ぬる心でござんまはいな^ア」うのまんでいを聞
 うへは茂兵衛とていきてゐられぬ人ごろし「らんならいつ
 所にまんでまださんすか」女房へきりも世のうはさも「すて、
 めいどのたびのうら」おさん仕度まや「ア^い」さめうてうらい
 地獄尊^かあくま^もに出げんま玉ひてま^もじやうのさいどをな
 したまふなまいだ〜「なむとかくごはまながらも又もやと

ちをくるじゆすの玉もれさんが氣にかゝる合ねないぎさんへ
いひわけもなつのなかばのすゝみぶね合煮んのはしまであい
そめて合外のね客の何の其秋の七くさならねども合花比色香
とりやされてはれたせうこのいひが、り合きかぬさせうもと
りかひし戀にうきみを入はくる合茂兵衛命とかけがうも夫さ
へきへてあだしの、つゆとなるみじやないかいな合た何事
もかんにとさすが茂兵衛もともなみだ合とはる心を取直し
たがひみかくごのさくらかばいすでにちりゆくの所へ「松
頭佐吉はかけきたり」お二人りながら死ぬにはおとべぬおさ
ん泡の切多で才三が怒すんだまんたらは喜藏様の手にいりま
したぞ「スリヤたからの手にいづたか」何にもかもちあいて
お二人りともにはれまするる「エ、かたじけない」けふのち

しごをひきかへて合とささるほうの万としれさん茂兵衛が唇
歌也かり乃すへぞめでたけれ

○明烏花濡衣

まら雪の匂もるも戀にたくらべてとけぬ思を浦里が合どう
たるんでかのひとに。あふた志とてからかわいさが身にしみ
くどほれぬいて合あけてくやしきびんの髪なであけく「浦
里モウたれもさー合はぬいかや「見世が出たれば今のまはた
れもくることではござんせぬわいな」ヤレく此廣ひ二階に
身ひとつのれきどころのなといふはア、いんぐわな身に成
たことじやナア「サア此やうにせさせかれさぞ氣づまりでご
さんせう夫をこらへて下さんすもみんな私がりわいと思ふて
のれこゝろざし嬉しうござんすかたじけないわいな」いた

さしむればいやおれゆへと引めて物をも云ずしめあひて
 跡は涙にまれけるが「いつ迄こうして居たとてもかぎりもな
 き二人が中長居するほどそなたの身つまり此程だんくはな
 す通りカノお人へいろく」と手を廻し云いれても叶わぬ望み
 と願ひ書迄もつき戻されし身のはいなさ「うなたも共にとい
 ひたいがいとしろなたを手に掛てどうなる物ぞながらへて
 わがなき跡で一ツべんの回向を頼むさらばやと云すてたつを
 「取つひてあんまりむごい情なや今宵はなれてこなさんのま
 めで居さんす其身なら又逢ふことのあらふかどたのしむ事も
 有べきが「兼て二人りが取かわすさせうせいしはみんな仇」ど
 ふて死なんを覺語ちら三づの川も是此やうに二人り手を取り
 もる共と「なせにいふては下さんせぬころしておいて行んせ

ど男のひざにすがりつき身をふるはしてなきおたる「やり手
 のかやが聲として「子供やみどりやアたれもぬぬのかヲ、
 淵里さん「アイくおかやどん何のとうでござんすへ」外のと
 うでもござんせぬがゆふぐから居つゞけの客人ありやどこの
 おかたでござんすへ「サアどこやらの御子息さんじやといふ
 事でござんす「イエくろううは緩させぬ儘にせかれたアノ時
 次郎サア旦那さんがとんでじやほどにサアござんせ」コレれ
 かやどんどふぞゆるして下さんせ「エ、まだるいくろんな
 あま口でさくやつじやアぬへサアおれと一しとにうーやがれ
 「罪もむくひも後の世もーらがあたまの米うみも張さる斗り
 のやまはら立引立て、ころをりにける「跡に大せい男共屏風
 の内の時次郎むにむさんに引出し踏やらぶつやられた、まやら

直におもてへはき出し門の戸はたとしめにけり
 折節ふり來る雪ふいさうちには亭主が浦里を庭の古木にく、
 りのけはふきおつとり聲あら、げ「ヤ、浦里のくるしみは
 こゝろからだアろうべつ遊女をせつかんして客をせくこと客
 のためニツには女郎大切いんだいが猶大事アノ客もまだ若ひ
 人だがあんまり繁々かゝわれてを親懸りならば勘當うけ主持
 ならばれやかたの手前いぞこのふをしれた事だ此じうねん季
 をきり替へも皆あの客のため此上はしんじうするか、け落か
 といのく、りは一れてあるせんさくだア是までたびく云て
 も聞いれのねへがうつまはりめアノ時次郎の事をすつぱりと
 おもひ切てしまやアがれコレ男共うら里を氣をつけら」とい
 ひ捨ててころ奥に入る「浦里あををうちながめわかれとなれば

今更に涙よくれて居たり「アノ時さんはどてふどふして
 居さんすことじや、らまいちど顔が見たいわひたいわいなア
 「さのふのはれはけふの夢今は我が身につまされて義理とい
 ふ字は是非もあや「アノ二階でひく三味せんをさくにつけて
 も思ひ出すいつぞや主が居つゝけに寝まきの儘に引をせてひ
 く三味せんの面白さうれにひたかへことひのくるしみアあじ
 きないうき世じやなア「すひた男にわしや命でもなんのお
 しかろぞつもの身のきへばうらみもなきものを「わしが此身
 はどふなるとも「譬このみはあわ雪と、もにきゆるもいとほ
 ぬが此世の名残に今一度逢たい見たいとしやくとあけあき
 やう氣のごとく心もみだれ涙の雨にもきとけて前後せうたい
 なかりけり「男はかねて用意のトて一口にくわへて身をか

四十三首

ため忍びくゝて家根づたひ見るに浦里うれしやどかなしさと
わさあぶなさにかはいと一トこゑ明がらすのちの浮氣名や殘
るらんく

○其小唄夢廊 上

榮行人一ト盛花一時あすは白井が身のはてもしあんのほかの
つみどかにひかれまるはへ通ひぢのはでなすかたにひきうへ
てけふは名にちりかゝる淺黄櫻と夕あらしひま行駒の道もは
やかゝるなわめに大木戸の色もへにこそ命さへ「あいた見た
さはどびたつばありかどの鳥かやうらめしや「是も也かりの
紫と二人が中を世ようたふ色品川はかわれどもけふぞささず
の無常音てまをとめて「かくすまんの御見物は我身のさん
け生れ古郷はいばの國行先をもはぬ若げのたんりよ義によつ

五十三首

て人をがゐしはるく下りし此あづまぢふと色里へ通ひうめ
しげくゆけば浪人のたくはへつきぬすみとつれる金也へに
れどくるしむ此身のつみ若ぬれ方はとりわけて見るほどの事
うらやましくついおをひつくふりやうけん色とよくどに身を
はたす此身の見せしめごうさらしごふのはかりやじようはり
のかいみにうつるつみとかど今さら思ひあたりました「われ
どくやみのさやうくんも心の駒のいろがれてこゝぞなにふる
鈴の森さゝるごはさしてくるれりしも「くるわをぬけて小紫す
るも何らくかけ來り「權八さんまだしなすにゐてくたさん
「たか「うらや小紫ゐかまざんじのゆふよはゆるし「くれん
「有がたふてさり升る「嬉々なみだに取すがり手桶の水れくみ
かわすひさくのゑにしなれとあの世をたのむ「なむめうはう

れん經く「めうほうれんげさやふの今あのとの雲と紫がら
ましめ切て鍛つるぎの山すくに白井がしゆら道もこれなん南かの一
夢にてねふりの夢は覺にけり

○濡嬉浮寐島

いにしへを。すてばやきりも。たもふまじ。くちても。さへぬ。
うき中に。うはさあすだの。どてのしる。とけた。ふたりがふ
く。さあひ。めめも。むすばぬ。かりまくら。「水のでばなの。さ
ほしつく。たれにゑんりやうも。たななし小艇。もやいにれ
て。ちりもみじ。たつたに。あらで。あやせ川。いろのうきとの。
伊之助に。また。もる。やらぬ。わかくさが。じつと。まこと。の
あつごうり。こりかたはりしあいぼれ。が。ゆくへ。あてども。な
か何。み。とそめに。うれと。しんぢうも。いなぬかくごぞ。わ

りなけれ。じつと。る手のもつれとり。みせつみられつ。に
こりどかほど。かほとれすりひうち。すいつけたはこの。ひさ
らまで。あつくなりたの。やまからす。かわらくと。ひきよせ
てくどく。いふもぢちながら。いつぞやしたのみまぢの。とた
んな。さんかた。げらしやうの。たふくの。なかで。こなさんの
おもしろいさの。もちやうしや。すいたらしと。かけごと。に。
こふいわんした。どうさーやんしたと。たまへの。まねをたの
しみに。せぬまいーばー。もないわいな。うのまねごとか。くせ
となり。わらわれくさの。ついなま。たどへ。ろにそます
ども。すいなあまへのことなれば。くがらするみあたてる。と
て。ざりーべんのあたつきは。けつくて。ろのもめるたぬ。と
うやあまへも。老つにしてあらしを。こひの。とく。ひの。とく。ひの。とく。

まどにくらすられしさといたきまめたるみずどりの。つがいはなれぬ。ふせいなりか、るところ。むかふじまかほみせだけにあさうともわきのすか不にかけぬなしまけぬきまやうのこませもの蝶々どまれやなつけんけれとに回んつ、みでみなごぞんじのまだしろめきのきやくさんがたにかうしでそでおひけ四ツすきにうれとまつたあさのかへりにもつてはぬむいめだまのちやうのもろつばさふりかたげたるもどりあしきつてもむまいまたつゝみうつわついなのおにうちまめよふくわうちどのめかほをまのひつれてのきばのむめまつたけで三々九どのさかづきにまかいなみくわてうゝのかわらぬいもせいろなあしたてるびやうぶのまやうつがいな蝶男蝶のたわむれありぶこゑすてふていのこちやうがあなたへひらりこな

たへひらりひらくひらりかせの蝶みろをわけはのちやうはながたかハツはなかたのかにめて、さるわかちやうのいろくらべふるひをんくでやつてくりよ。「はなに蝶々まわしやきがもめるきてはちらくまをわせる。いてさちやぐんくヲヤヤレくくろふたぞくそうだんべまどもなやナルうかれていつまでなかありひゆるりとあしけりあたのまみひどりちやくくちやちやらくうりはかせてはしてはりやくふけてさんやにうつかみのきぬたまくらゑさとあらしまたになるて乃はたさむくつささくまらあどふるかもぬくらのやみやてもるらん

●淨るりの部

○伽羅先代萩御殿場

どいふもの、かあいやな若の成爲かねてとまかくごいきは
めてゐながらもせめてひとらしいもの、手にかゝりてもあぬ
るかすせういやしい銀兵衛が女房連れのやびばにかゝりなぶ
りころゝをげんさいにりばにみて居る母がきはどのやうにあ
らうどうあらうれもひまわせばこのほどからうたふた歌に千
松が七ツ八ツからかなやまへ一年までどもまだみぬぬ二年ま
てどもまだみぬぬとうたの中なる千松はまつかひあつて父母
にかほをばみせることもあるねなじなのつく千松のりなたの
百年まつたとして千年万年まつたとしてなんのたとりがあるぞい
な三千せかいに子をもつたあやの心はみな一ツ子のかあいな

にどくなまのくふなといふてあかるのにとくとみわたらこ、
ろみて死でくれいといふやうなどうよく非道な母親かまたど
二人と在るものう武士のたねにうまれたはくわはうかいんぐ
わかいちらゝやあぬるを忠ぎといふことはいつの世からのあ
らはしぞととりかたまりし鐵石心さすが女のぐにかへり人目
なければふしまぬびせんごふかくになげさしがことわりすぎ
てだらうりなり

○義經千本櫻餅屋の段

一十四百
すぎつるはるのころいろめづらゝい草中へるにあるやうなと
のどのあいでこれもりさまとはつゆしらすあんなはあさいこ
ゝろからかあいらしい、としらしいとあもひろめたがこひの
もと父をさてるす母さまをゆめにもあらしめて下さつたらたど

ひてがれて死すればとてすしやの娘がはれらりとか一せうつ
れそふとのごじやとおもひこんでゐるをを二世のかためは
かなはぬねやへのぎりにつぎつたとはなさけないおなさけに
あづかりましたとどうとふしせんごせうたいなきしづむ

○お俊傳兵衛猿廻し

りりやきこゑませぬ傳兵衛さんねことばむりとはねもはねど
ろもあひかゝるはじめとりをゑのすゑまでいひかはしたかひ
にむねをあかしあひなんのゑんりとをないしやうのせわしら
れてをねんにさぬほんのめうと、ねもふものだいじのくゝれ
何とのなんぎ命のきはにふりすて、女子のみちがたつもつか
不孝ともあくゑんとも思ひあきらめこれ申一恙をにころし
て下さんせとかくせしかみそりとりなをす

○三勝半七酒やの段

詞

いまごろ半七さん地どこにどうしてござるやらいまさらか
へらぬことおがらわしといふものないならびさうとござまも
れつうにめんじ子までなしたる三勝どのとくにもとびいれさ
しやんしたら半七さんのみもちもなをりごかんどうにもねを
ふまいねもへばくこのそのがきをねんの秋のわづらいにい
つそしんでしもふたらこうしたなんぎはあるまいものおきに
いらぬとしりながらみれんなわたしがりんねゆゑういふしは
かあわすともねるばにぬたいとしんばうじてこれまでぬたの
がれみのあだ今のおもひにくらぶれば一年まへにこのろのが
しぬるこゝろがつかなんだこらへてたべ半七さんわしやこの
とうにおをふてゐるとうらみつちみはつゆ不どもねつを

もふしんぞつしんをいやまざるうきあもひ

○朝かは宿やの段

四十四百

詞

あはち―申もはずか―ながらもど我しは中國うまれようす
あつて都のすまいひと、せうじのはたるがりこがれりめた
るこひ人と 地かたるふまさへ夏のみじういちぎりのほわ
ないわかれどころたすぬるたとりさへ おもふにまかせぬく
にのむかい 詞れや―にいさあわれなにはのうらをふなでし
てみをつくしたる 地うきおもひないてあかしのかさまちにた
ま―あいはあいながらつれないあらじにふきわけられくに
へかへればち、は、の 詞おもひもをらぬつまさだめたつるみ
さるをやぶらじとやしきをぬけてかす―のうきめをしのぎ
みやこじへのばつてさけばらの人はあすまのたびとさくかな

しき地 またもみやこをまよひいでいつかはめぐりあ、さうの
せき老をあとにあふみじやみのおわりさへさだめなくてひ―
く―にめをなきつぶしもの、あいろもみずとりのくがにさま
をふかなしいつのおよいかなるむくひにてかさね―のなけ
さのかずあわれみたまへどばかりにてせんどしをたいなかり
けり

○けいせいあわのなるとじゆんれい

コレいま一どかほをどひきよせてみれりみるほどむねせまり
はなれかたあさうきおもひうれせしほねどまことちす老那
ごりおしげにふりあへりどこをどうしてたづねたらと、さま
やか、さまにあはれることぞあはしてたべなむたいひのくわ
んれんさまち、は、のめぐみもふかきこゑわでらほどけのち

五十四百

かひたのもしきかな

○すがはらでんじゆてならひかゝみてらてや
みだいわかきみもろどもにしやくりあげたる夜なすだめいと
のたびへてらりのし、やうのみだぶつしやくむにぶつ六だ
字のうげのでしになりさいのかはらですなでほんいろはかく
このあへなくもちりぬるいのちせひもなやあすのよたれかる
ひぢせんらむうぬめみるおやご、ろつるぎとしでのやまけて
ぬあささゆめみして、ちしてあとのかどひにゑひもせずけふ
はこそやうをたちわかれとりべのさしていでてゆく

○いがごねだうちうすごろくぬます

どもしびのたねしよりアノめうやくをどうがなとれもむつま
しがみのいんぐわどうぞ夜若ひにこれまをしてよいのことは

このばざりおとしよぬれしれまへにまでくらうをかけしふて
うのゆみけふやしなふかあすのとはわがみのせがわにみをと
げてと一日くらしに目ををくるとどうぞ夜じひに夜れうけん
あづまうだちのはりもぬけてひのいきぢにふみまをふて、ろ
ぞおもひやまれたり

○たまものまへ三だんめ

ぬぐらはなれしほど、ぎすこでこにあらぬみづからをこのと
しつたのごよすいくまだうのうへにいもどまでみづからをた
すけんとさまくのこ、ろすういれもひはわせばまわすほど
うらあろろしたみのみとうがむねにせまつて一トことのおれ
いにくちへいでぬわいなてんうためをみせますのもみぬみ
すからのいたづらあらとてもうはれぬてひゆゑにかくごはき

まめてたりましたつちりごをんもおくりもせでさまだらま
するふさうのどがおゆるしなされて下されませどてあぐもら
せばはつはなひめノウきよくもないろのねことばたと然いつ
くのたねなりともわらはかためにはだいいのあねさんねまへ
のころさぬみずからをイヤノウもじはあどにながらへてた
よりすくないは、さまのおみやすかいをたのむぞやイヤみず
からをイヤわらわをとしをあらういしを、どぬがて、あねぬ
びんとは、おやがいすれをそれとはわけかねるむねのねみだ
の三ッせがとみもうくばかりなきかなしむ

○世四こうじゆしゆかう

あてうしよとてたすがたをるにはか、せはせぬものをたま
しいかへすはんごんこうめいぐわのちからもあるならばかあ

いとたつたひととのねふねがき、たいくとあぞうのうばに
みをうちふしりうていこかれみへたまふ

○かみじこたつ

ねさんのあされてつくくどかほうちまもりエ、あんまりヒ
やぞへ治兵衛さんうれほどねごりがあしいならせいーか、ぬ
がよござんすなせにおまへはろのよふにわたしがにくうござ
んすへコレくうれやまあなにをいやるぞいのこまでなした
る赤かにイエ々々にくいろうなくにくましやんをがうか
いなあねどいーの十月なかのいのこにこたつあけたしうぎと
てこれふ、でまくらならべてこのかたによばうのふどころ
にいおにがすむかじやがすむかうれほどこ、ろのこりならな
かーやんせくろのなみだがーいめ川へあがれたらこはるが

くんでのみやろふぞわんまりむごいじへいさんなんぼれまへ
にどのようなせつないきりがあるとしても二たりのこともはお
まへなんともないかいなとまゝ、ろのかぎりまどきたてうらみ
なげくぞまことなる

○八じんほんじよう

みやこでわわかれやてよりも何たいないまどながらち、うへ
やは、さまをおもうあんじいどこへやらあなたのことかくに
なつてほんにねたまもわすれかねたいみたいとあけくれ
にてがれいたふているものをきてへませぬとむすめまにあと
やさきなるうらみごと

○がつぼう 下のまき

わものあげなるたはてごせんり、さまのおことばあれといか

なるくわこのいんゑんやらしうんどまさまの病とはねたまも
わきますてひてがれたるひあはつてうちつけにいふてもをや
このみちをたてつれないへんじかたいやどなをいやまざるて
いのふちいつろしづまばどてまでもあどをしたふてかちはだ
しつ、のうらくなにはがたみをつくしたるて、ろねをふび
んどれもふてともくにしゆんとくさまのゆくゑをたづね女
夫にしてくださんずがおやのれまひと手をあわしおがみまわ
ればは、おやもいまさらあきれわがこのかほたけうちまざる
ばかりなり

○上かみや

かりそめのあろひにもたまのてしよてくるまどもてかしづか
れたまいしみがいまはのせのくさのうへあや、どんすのし

とねともにしきのよるのものとはこのうばがひざのうへさ
ぞやゆめにもうつ、にもむかしのたまのごてんどもおもふて
ぎよしあるおこ、ろが一ばいいとしぶごさるはとひざにひさ
よせたきしめて人目もしらすなげさしか

○中しやう姫雪せめ

あらいたわしのちうじやうひめ七日な、よはなきあかしあま
るやうかのあさのゆきわれをせめくのたねとなりみもひへか
へるうのうへにすあしにゆきのこりみちつるぎをふむがど
どくにてよどめはゆけどうちた、くこすへのゆきがひつとも
り背にうちか、ればどうとふしあさればた、くわり竹に手あ
しもしびれみもちいみいのちもいさもたへくにてゆるさせ
たまへは、さまとこへもあしませすなきたまふ

○かさ糸物がり 土橋

エ、このさぬ川はなにしてぞどかけゆきたをふをひきもどし
るりぎわしつかどこへふるはしまだのめくといぬけてれつ
どのあどをしたふのかエ、はらのたつくといひさまわしく
ひさまわされてうたかたひめを、くの人にかしづかれうやま
はれぬるを身にもひなのたびじをた、一人さまよひたもふら
きなかにれも

○しろき屋

おこまはかほをふりあげておもひがけないこよひのよふすき
かしやんしたらはらがたどふさをにくかるふさりながらそり
やまこゑませんさん三さんおまへどわたしどろのなりはきの
ふやけふのことからなやしきにつせめたるのうちにふとみる

四十五首

あてはづかしいこのいろのをたもどからそつとめたりのと
ろではてんじんさまへぐわんかけてむめを一一ようたつた
ぞへろのをかげにやらうれしいへんじ二世も三世もささのよ
かけてちかひしななじやないかいなこよひのことをしらせま
じといだんかうもせふをのどまぢかねているものをあんまり
むごいあいろづかした、いてはらがいるならばこゝろのまゝ
にたゝいたうへもふかんにんしてやるといふてたんのふさせ
てたべとをとこのひざにすがりつきよろをははかるしのびな
さしんじつみへていじらしく

五十五首

○川柳狂句之部
七曲の糸真直な國の知恵
音曲のふしも調へる直な御代
滑るは覺悟墨染る鬢の雪
國の鼠があらわれた釣り天井
道ふて行道は山上のお龜石
其元を糺に清き加茂の水
逆さまの竹は直なる法りの杖
窮鼠却つて馬を噛む本能寺
竹筒の梅笑ふてる松の内
あたまから尻て出世をする石田
爾忽はせよと御題の雪の松

月 朗 笑 其 竹 山 長 魁 日 喜 春
丸 門 峰 馬 材 命 丸 代 敵

六十五百

綿帽子着たよふ雪の嫁菜草
負ふた子に教へを請る天保人
雀長家に掉竹のもめか出来
山懐口に笑ッてるちごさくら
夜の鶴鷺に取れし子で狂氣
二聲は星が啼たか闇鳥
貧狀に金盃乃添ふ身の光り
短か夜は咄しの枝に鳥が啼
水取時分飛火野にもゆる艸
偽りも世の道具なり鳥おとし
千とせ迄縁と見合に鶴の茶家
ま、粒て鯛戎座の見舞物

如玉狸一魚大棹山笑雲山落
水蘭光好水六竹材門床笑風

七十五百

淫賣女の束髪あたまから針の山
雨の日は巻て置たき糸さくら
ほのくくと白めい黒む鼻口の眼
やうくり此器械が損じ車止み
金の暖みて解て居る雪の肌
巾着の器械の製造驅黴院
菅笠も夜るは重サなる夫婦族
寐てる戸へ朝日さし込む新聞や
朝起は家を寐かさぬ心がけ
眞直な針で鯛釣る文廻し
行幸が僥倖に成る洋服屋
弓張の月さへ渡る矢矧橋

雲一芳ノ喜圓笑情花大眉醉
床止々代司門妾總六墨月

八十五百

老人の皺のはしなり尙齒會
鯨釣るみえ廓の蚯蚓がき
割レて亂れる玉子やのませ娘
犬と成り敵へ入込む猿まのし
美婦に迷ふな金屏も中は反古
懷舊の涙溢る、湊川
登り鮎一目千疋よしの川
目の覺た作意馬琴の夢想兵衛
あやまらそとも改良は憚らず
車夫改良去に車とはいへぬ袴
西陣は都そ春の錦織
猫間の流れ末で添ふ鯨川

笑○厚不魁掉厚朗花情大

門一丸門染竹丸選妾六

九十五百

晝寐する顔に馬琴の鞍を置
蟹が迹行柿色の川さらへ
夢の世といふ管八分寐て暮し
雨乞の美人は男にも早り
船が棹追て蛇と成る日高川
夢の場をうつ、て見てる蝶々齧
大根の役者葱のちよぼ語り
栗に目鼻を附けたやう丹波下女
幸崎の松十返りも見る汽船
志賀の琴合す汽船の調子笛
よとみ無き心は世事を開流し
國の文鎮金鉄な一致心

錯一空醉笑紫情皿笑和雨喜

月好北門月門人妾丸門合堂代

一寸ソの卯にも五分の花心
 隔て無く心を附る慈悲の文字
 徳は鳴り諫鼓は鳴らぬ御代静
 齒にさぬを着せぬ心は錦なり
 怪我は無し心の上に置く刃バ
 琴を弾く手付て葉茶を撰る娘
 句すまふの手捫腕より腹の力
 飯の種かぎ出して喰ふ探訪者
 釣取つた鯛に戎の紙幣を出し
 稻妻と雷電で場も鳴るすまふ
 澁かつた皮はむけず柿の禮
 石山に光る源氏の湖月抄

一山史魁笑角魁二素長空箭
 好材遊門丸見風命北妾

生キるは覺悟亡者の國事犯
 一心の太助に坊主往生し
 本調子で無し狂亂の三下り
 還曆は老ひも若やく祝そめ
 立合も蛙のやうな村すまふ
 鱧の様ふな躰を首尾と雜喉寐客
 下夕口はまた紙喰ハぬ鹿の子齧
 紫も石山で見ると古句も搗き直し
 賄ひの慈悲は夜這に空厨
 商標の鶴は外國飛步行
 餅の題出ると古句も搗き直し
 曆には無ひ大小を湯やで知り

一素郁一素朗山廣酒皿四
 丸見人翁好風 材人樂丸海

二十六百

瀨は淵と瓦蝶なげる飛鳥山
 美女が笑窪は壯士のれど一穴
 餅好な噺して酒屋咽につめ
 三弦入て餅の白數十二月
 泣癖で妾且那をよるこばせ
 雪隠で掛取防く年の尻
 尻癖と手癖はいつも悪ひくせ
 頼母子のからくれなひに親困り
 うか〜と年の寄る人の古曆み
 走り井の餅旅人の足をとめ
 盥から聲を振り立て、鞞市
 兄弟共和酒樽へ餅を入れ

郁酒好情其山月鬼新雨其笑
 翁樂月妾峰材丸笑正堂峰門

三十六百

五日の風て吹ちらす禁酒札
 酒樽のかたむく迄の月を愛
 祝ひ餅二ツに成て三ツ配り
 人立もね〜つまりたる年の市
 神代から伊勢にはあれぬ女おんな夫おとこ岩いは
 赤貝をだいに包む緋の袴
 百薬此銚子はたらぬ程の酒
 仁の國民は義心か生れ癖
 舊弊が束髪になる癖直し
 誰をかも智人にする小學校
 汲み分けて我黒髪を酒に替へ
 君か爲おしからざりし海防費

雨一空情郁酒送朗皿鬼魁可
 堂止北妾翁樂り丸笑吟

四百六十六

世渡りも浮沈みあり遊び餅
高雄鑑仙臺堀へ尻を向け
大小不動廢刀の代此曆
ひとりもの唄アの役も自分の手
さわつたらあちな氣に成熊の皮
辨慶は不用の鎗と八ッ道具
若後家の地震は家をゆり潰し
お渡りを仕舞ふて嫁は巾掃除
藥研形りなれと藥なものでなし
盃が濟と喰ひ初喰しりめ
夜すまふは晴天よりを雨がよ
月の有る所う花なり雪の肌

皿月笑岩都芦史蛙若笑松史

丸丸門橘柳勢櫻 松門鶴樓

六百五十五

一本の柱で建た阿房宮
御輿の轂持上ると鑲が鳴り
目の早ひお子とお乳は前合し
晝も物いふ氣のふとひ下女手代
そつと手をやる水上の葛饅頭
好こそ物の上手なり子澤山
雪隠の錠まへ咳の只一ッ
痢癩の虫は小サヒ腹に住み
鴻門で沛公うまく喰込し
麓の畑もまころめく甲山
雲雀はまやべり驚い吃りなり
三味線屋乳がたらぬと灸をすへ

成柳竹谷殿岩閑富成廣笑正

團

獨曲雅水り橘月丸郷人門次

六十六百

茶の出はな見ても道灌思ひだし
蚊を焼て待夜は筆も丸裸
門の蜂忠義の胸に針をさし
生々るも折もむつかしき杜若
千松がさし出て鶴の壽を延し
佐野の宿其日雨たと居所なし
樟腦の一劑離に壽の補藥
茶の銘は初音梅か香に爐に薫り
明徳の道迷踏ふ秦の闇
翠丸で四海を握る將と知り
韓信はあつはれ水にうしろ見せ
武器錆て士族家業に腕磨

岩 谷 點 柳 史 松 泉 二 素 蛙 笑 巖
橘 水 々 曲 樓 種 月 橋 人 門

七十六百

琵琶の夏瘦近江路の民は肥
内で寐ぬ貨幣は外で子を孕み
塵取の額は衆生をすふ所
世の中は金がものいふ電信機
郵便と質は利足で飯をくひ
和漢の煙仁てよみ懸ては笑
川越しと腰越名譽佛と文
万民の邪氣吹はらふ御仁風
せり上の旭地球の大舞臺
信寫せ誠見通ふす御神鏡
またりの流懸せぬ水る國
橋でさへ低ひは人に賞美され

岩 柳 榮 郁 酒 若 蛙 芦 泉 閑 成 榮
橘 曲 翁 樂 松 勢 月 月 郷

一天の君万民を御慈悲心
 一戦で鉾先なまる武藏坊
 閩津浪嶼ア両輪の橋が落
 はつさぬやうに枕さす嶼の尻
 鷓鴣の來る迄鳩で口を吸ひ
 むつまじひ明じやといへば歎しやと譽
 提燈の皺やはうかな手でのばし
 前の馬たけは瘦ぬと常世言ひ
 麥の脊かのひたと村て戀の謎
 酒呑の心迷はせいろ娘
 仲居の幕切ちよんの間へ引道具
 次覽は余の瀧壺へ氣をよせず
 へチヤ
 素人枝
 榮門
 笑門
 岩橋
 ツヤ女
 古船
 笑門
 成郷
 其龍
 間心

警女りんき鷹鶴の耳鷹の耳
 旅立の宵はする事だらけなり
 貸夜具の虱止宿の定めなし
 また少し聞へるうちは石盤
 奉公猿原由を糺すと手長猿
 思案する後家はみさほの捨小口
 天上眉頭痛の灸かと馬鹿思ひ
 水の出はなの客を待つ流の身
 臍くりて西國へ行婆々安連
 西洋の離縁証書も三横半
 穴うかはつて氣を燃す蜂の嶼
 齧髭測つて鼻髭延す馬鹿
 正團次
 岩橋
 ハヤ
 竹雅
 青枝
 有圓
 成郷
 閑月
 士峰
 柳曲
 松鶴

嘗ても無く下女ぶらくと戀病
 助言と助言さうて居る下手將基
 洗濯はそれと小町に竿不用
 冬瓜に化たかばちやの村眞事
 ちとつまみにくひは下女の高ひ鼻
 色を賣る西瓜の松を緋縮緬
 洲濱に砂糖化粧した下女の鼻
 梅干親父のうけてる筵敷
 虫聞の連には困る咄し好
 其あしたあんな物かと嫁思ひ
 二日酔ひ呑んだ所を考へる
 顔洗ふ度黒ふ成石灰や

富士丸
 若松勢
 若茸蛙
 岩橘
 正團
 笑門
 正團
 井蛙
 小鈴荒
 史樓
 榮へ
 竹雅
 辻占
 琴糸
 閑明

戀ひ戀人の胸迄むかつかし
 ませ娘齒よりも乳首先へ染
 耳たけの聞學文を鼻にかけ
 裾除の内ぞ床しき廓小町
 紙屑は白無ひ方が奇麗なり
 うつくしき女房に後家の相か見へ
 腹が立よとひねつて機嫌とり
 金魚やは商ひすると荷が重り
 聞にあや有て娘の門涼み
 三ツに繼く間さへ調子を能合し
 廻文新發か流行高利活版師
 雪氷隔てると同し砂糖水

富士丸
 若松勢
 若茸蛙
 岩橘
 正團
 笑門
 正團
 井蛙
 小鈴荒
 史樓
 榮へ
 竹雅
 辻占
 琴糸
 閑明

二十七百

温泉に入ッて極樂見る地獄
 かゝる子の種もまかぬ小町姫
 知恵で編出す藤吉の筵旗
 袈裟の爲經とむ人が二人出来
 笑ふより泣て来るのが寺の福
 縁の綱引媒人の口車
 會者定離五條の橋と衣川
 後家狂ひ家の立ッた源氏方
 是を着た時は花ヒやと色紙當
 開けてる親新聞の儘添せ
 留守番を貰ふて頼と外へ出す
 本妻が柳で内に風か無し

まじめ
 濱の家
 芦村
 古松
 千九
 富士丸
 笑門
 壽鶴
 都柳
 柳曲
 芦勢
 松鶴

三十七百

盗み隠しか貞女なり腹の石
 川中で上た團扇は勝負なし
 初雪に千代は釣瓶を又とられ
 銀の猫咽ひ鳴らさず子にあたへ
 戸さゝぬ御代の門は三尺棒
 小原女は煙の足しに柴をうり
 余る知恵士卒の足らず藁用ひ
 大海の心に流す塵は無し
 逃込んだ螢平氣な茨垣
 鳥無き里も蝙蝠の傘ひらけ
 人皇乃道は鳥か教へ鳥
 上を見て足事を知る五湖の月

閑有閑
 梅枝圓月
 笑門
 素人
 蛙人
 史樓
 若松
 井蛙
 三羽
 閑月

玉子の御國亂レなき世の政事
 虫が知らせる我せこか來へき宵
 儉約は轉ばぬ先の家の杖
 親の意にいやくはせぬ老歳子
 開化の代虫が好かなひ銀杏鬘
 賣詞買すに置けは損い無し
 瓜ニツ花嫁里へ能ひ土産
 祝炮は響わたりて世は靜

史 若 若 松 正 松 若 史
 櫻 松 若 松 團 皮 橘 松 櫻
 門 丸 次 皮 橘 松 櫻

○都々一之部

風の便りに結んだるにし雨にまつぼり解く柳
 闇を僥倖ひろく嘶し洩る、雲間の月の顔
 つくす思ひの竹縁先に誰に添音か籠のむし
 程もよし簀の待合茶屋で殘る暑さの憂はらし
 晴で逢ふ夜はをび紐さへも解て嬉しむすふ夢
 靡くよふでも振のが氣質柳流しにうける情辭
 悔しまぎれに引裂く交を次でもしやと讀返す
 覺て莞爾と夢見のよさに化粧甲斐ある富士額
 逢た嬉さうれしきま、にうちで夜明す、さの中
 二人中よく幾千代うけて玉章で折たる女夫婦
 滯し首尾した今朝見るか、み是じや他人も悟る筈

好から名ざ、れ嬉しき覗く鏡に笑四の穴が明く
 好なれかたの宵はどうれし否十男の夜明けごろ
 暗い心がたがひに晴て矢張行燈が邪魔よなる
 宵にちらりと見初めた雪が今朝はつもりて銀世界
 忘れちや否だと春中を叩き又もむしんの念を押す
 つもる雪とは夢さらしらすあらむ障子におこす主
 のろいお客のよだれを溜て間夫の口をばぬらす奴
 死で花實がなにさくら木も散れば見返る人はない
 主が貧すりや行燈の火迄消して私しは苦勞する
 羽織着たま、終てろび寐の皺が悋氣の種となる
 色氣はなれた身は風のはかさろふものない枯尾花
 餘所の浮氣の綻び小口縫ふ針逸々むねにさく

月落からすが鳴とも儘よ歸へしやせぬぞへ今朝のしも
 憂者する身と繪書の皿は人の知らない色かある
 晝は彼して夜は此様してと世帯もつ日の仮規則
 嬉しい化粧の片手に逢状ひとり笑四の拾ひとみ
 長く結ぶの辻占うれし主に貰ふた縋子のをび
 なるかならぬか心の底を探る雑魚寐の足加減
 角形文字讀むれ方ものろく仮名の逢状が氣に叶ふ
 寢覺て、ろもよい夢のあと主に耻かし亂れつと
 酒のさげんで戻れば暁が醒たあとから管を巻く

●豊後ふし

○ふんど老まつ

本てうし

そもく松の目出たきことばんばくにせぐれ十八公のよろお
ひ千年のみどりをなしてこゝんのいろをみすまんのまぐわう
のみかりのとき天にわかにかきくもりたいうまきりにふりし
かばみかどあめをまのがんとこまつのかげによりたもふこ
の松たちまら大木となり枝をたりはをかきかさねこのまを
さまをふさきてその雨をもらさいらしかばみかど太夫とい
ふまよくをわくりくだしたまひてより松をたゆらともうすと
かやかやうにめでたき松枝にすをくまたすのよわいをばきみ
にさ、げてごしそんをかめのまんてうふる川の流たいせんき
んぐまもぎとくとうくくくどみくらの内系おさまる

いゑこそ目出たけり

○高尾

ねんがあいてのたのしみはやがてれの字の赤をつけていひか
ゑいみどなるならばすあしもやばなたびねなりつめるをつ
ねのこのもびでいとはりもちでものぬいならひはだぎ仕立て
きせてみてどのごのたけにしんせつがどいかはほんにうれし
かるうしてどうしてかふしてどま、になるみかなんどのよう
にねもひくらせしうのうちにより兼ねとれ、けなく二世のゑ
にしをむすびーがあだなちぎりかなさけねやわかれのふしの
うた方やあはれ果なき身のうへどなみだはるでに のはつ
あおもひがけなるふせいなり

○もどりかど